

平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一六―一

平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場建設工事に伴う平安京跡・西京極遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

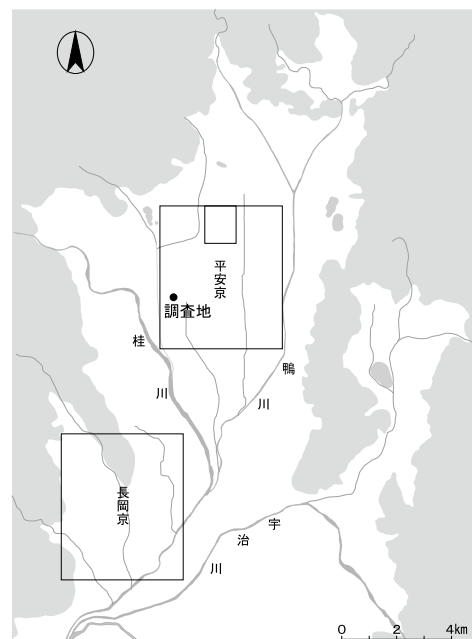
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・西京極遺跡（文化財保護課番号 15 H 521）
- 2 調査所在地 京都市右京区西院清水町131
- 3 委 託 者 株式会社上田鍍金 代表取締役 上田裕一
- 4 調査期間 2016年3月14日～2016年5月13日
- 5 調査面積 300㎡
- 6 調査担当者 持田 透
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内」・「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構種別を前に付した。
- 12 遺物番号 土器類、石器類にそれぞれ通し番号を付した。
遺物の時期は以下の文献を参考にした。小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 13 本書作成 持田 透
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 第1期 平安時代の遺構	6
(3) 第2期 弥生時代から飛鳥時代の遺構	8
4. 遺 物	25
(1) 遺物の概要	25
(2) 土器類	25
(3) 石器類	28
5. ま と め	31
(1) 遺構の変遷について	31
(2) 地質について	32
(3) 地震痕跡について	32

図 版 目 次

図版1	遺構	第1期	調査区平面図 (1:120)
図版2	遺構	第2期	調査区平面図 (1:120)
図版3	遺構		北壁断面図 (1:80)
図版4	遺構		南壁断面図 (1:80)
図版5	遺構		東壁・西壁断面図 (1:80)
図版6	遺構	1	第1期調査区西半全景 (北東から)
		2	掘立柱建物1 (北から)
		3	掘立柱建物3 (北東から)
図版7	遺構	1	第2期調査区全景 (東から)
		2	竪穴建物30 (南西から)

- 図版 8 遺構 1 竪穴建物 28 (北東から)
 2 竈 54 (南東から)
- 図版 9 遺構 1 竪穴建物 103 (北から)
 2 竈 104 (北から)
 3 竪穴建物 86 (南西から)
- 図版 10 遺構 1 竪穴建物 27 (北から)
 2 竪穴建物 27 遺物出土状況 (北東から)
 3 竪穴建物 63 遺物出土状況 (東から)
- 図版 11 遺構 1 竪穴建物 63 (東から)
 2 竪穴建物 34 (西から)
 3 土坑 52 (西から)
- 図版 12 遺構 1 竪穴建物 60 (南から)
 2 土坑 113 (東から)
 3 土坑 110 (南から)
- 図版 13 遺物 土器類
- 図版 14 遺物 土器類・石器類

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前風景 (東から)	2
図 3	作業風景	2
図 4	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 5	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	3
図 6	掘立柱建物 1、柱穴列 1、柱穴 75・89、土坑 25 実測図 (1 : 50)	7
図 7	掘立柱建物 2・柵 1 実測図 (1 : 50)	9
図 8	掘立柱建物 3 実測図 (1 : 50)	10
図 9	竈 53 実測図 (1 : 50)	11
図 10	竪穴建物 30・62 実測図 (1 : 50)	12
図 11	竪穴建物 60 実測図 (1 : 50)	13
図 12	竪穴建物 32 実測図 (1 : 50)	14
図 13	竪穴建物 28 実測図 (1 : 60)	15

図14	竈54実測図（1：30）	16
図15	竪穴建物103・竈104実測図（1：60、1：30）	16
図16	竪穴建物86実測図（1：60）	17
図17	竪穴建物137実測図（1：50）	18
図18	竪穴建物34実測図（1：50）	19
図19	竪穴建物27実測図（1：50）	20
図20	竪穴建物63実測図（1：50）	21
図21	竪穴建物85実測図（1：50）	22
図22	竪穴建物96実測図（1：50）	23
図23	土坑113実測図（1：20）	24
図24	土坑110実測図（1：20）	24
図25	出土土器実測図1（1：4）	26
図26	出土土器実測図2（1：4）	27
図27	出土石器実測図（1：4）	29
図28	断割トレンチ配置図（1：300）	32
図29	トレンチ1断面図（1：20）	32
図30	トレンチ3断面図（1：80）	32

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	25
表4	土器類一覧表	30
表5	石器類一覧表	30

平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡

1. 調査経過

調査地は京都市右京区西院清水町131に所在し、周辺は工場や住宅が密集する市街地である。調査は、工場の新規建設に伴うもので、工事に先立って京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、遺構が重複して残存していることが判明し、発掘調査が必要と判断された。発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、平成28年3月14日から調査を開始した。

調査は現代の造成土と中世の耕作土を重機によって除去し、地山面直上で平安時代、古墳時代、飛鳥時代、弥生時代の遺構、遺物を調査した。このうち平安時代を第1期として調査し、飛鳥時代から弥生時代を第2期として調査した。調査の段階ごとに文化財保護課の検査を受け、平成28年5月13日に調査を終了した。なお、平成28年5月7日に調査委託者である株式会社上田鍍金の社員を対象とした調査見学会を行った。

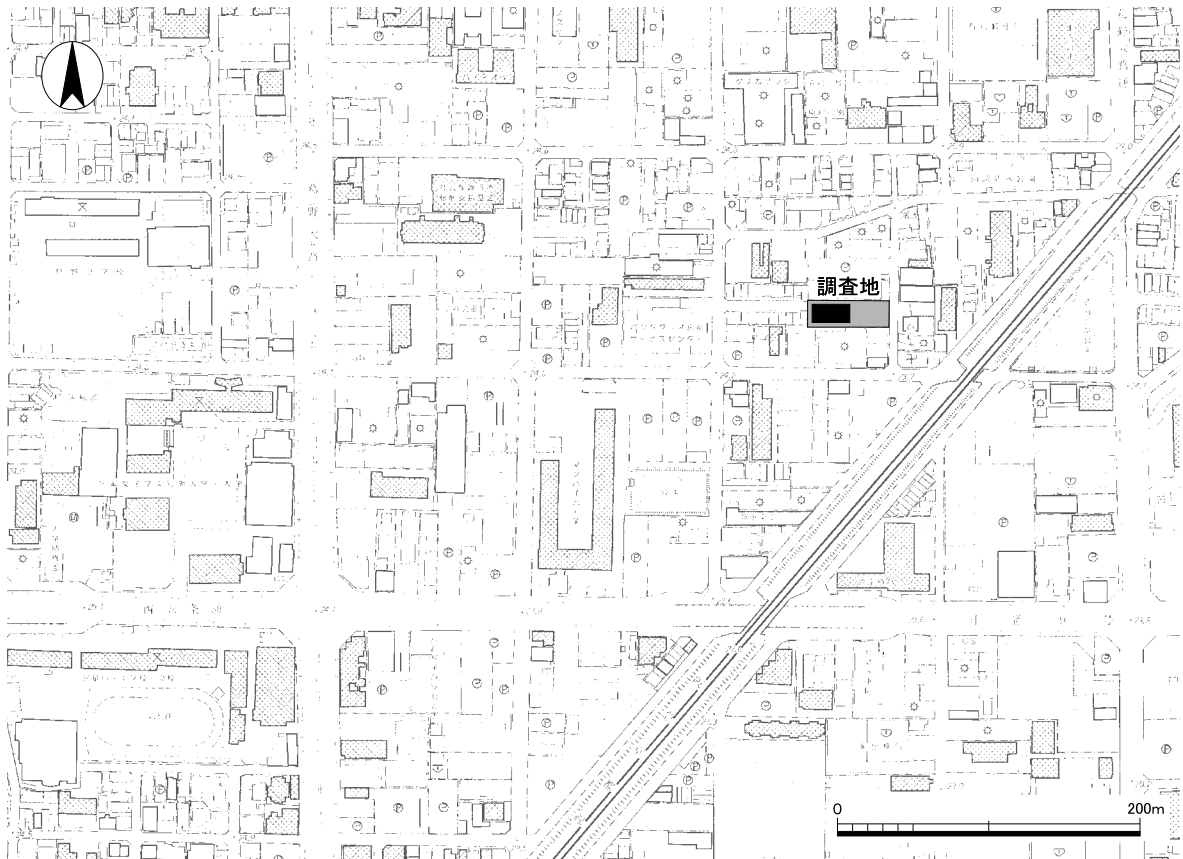


図1 調査地位置図（1：5,000）



図2 調査前風景（東から）



図3 作業風景

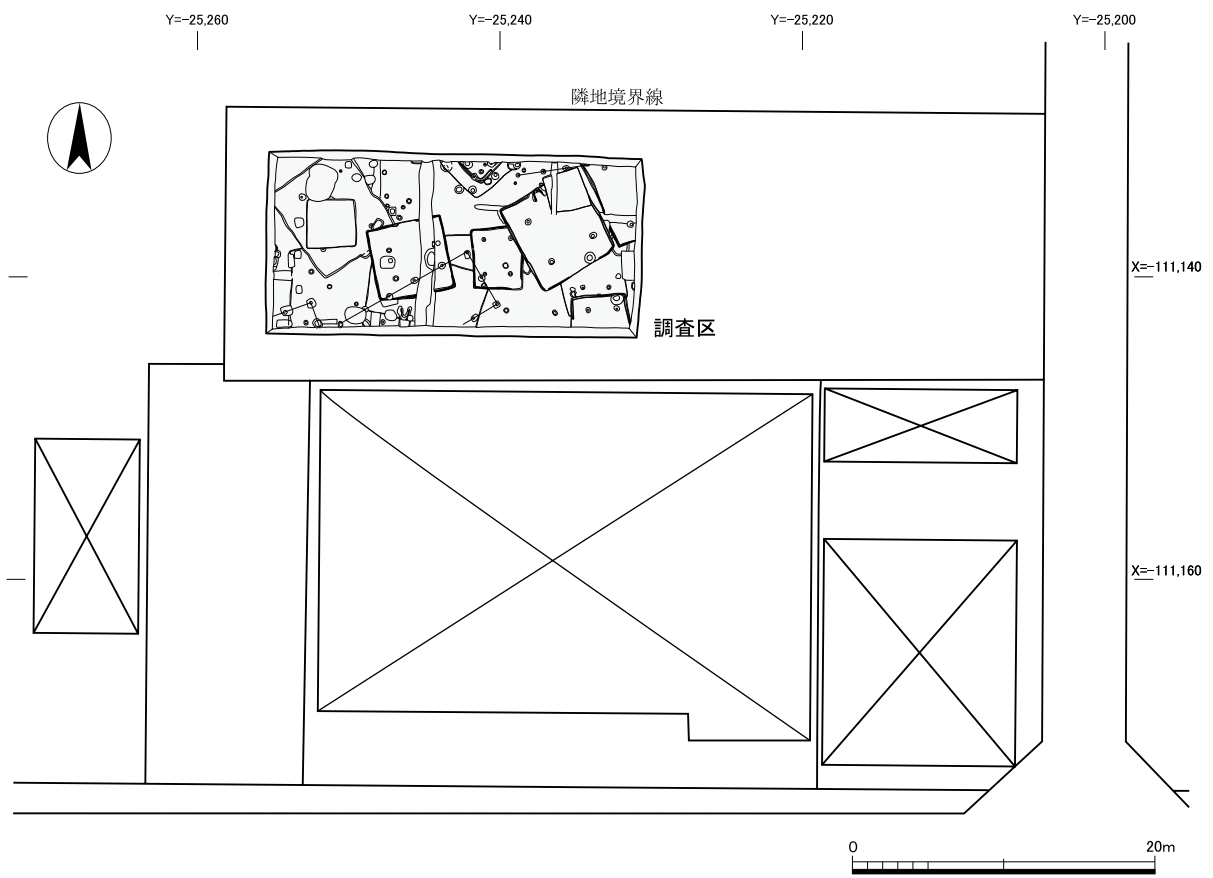


図4 調査区配置図（1：500）

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

平安京の条坊では平安京右京六条四坊一町跡にあたり、東は木辻大路、北は五条大路、西は菖蒲小路、南は樋口小路に面する。調査地の条坊には居住者の記録がないが、周辺は「小泉荘」が広がっている。平安時代中期以降は貴族らの居住域としての利用はなく、安土・桃山時代に御土居が形成された時には洛中に含まれず、江戸時代の絵図には西院村の表記がある。また、平安京造営前は西京極遺跡の範囲にあたり、縄文時代から奈良時代にかけての集落遺跡とされている。西京極遺

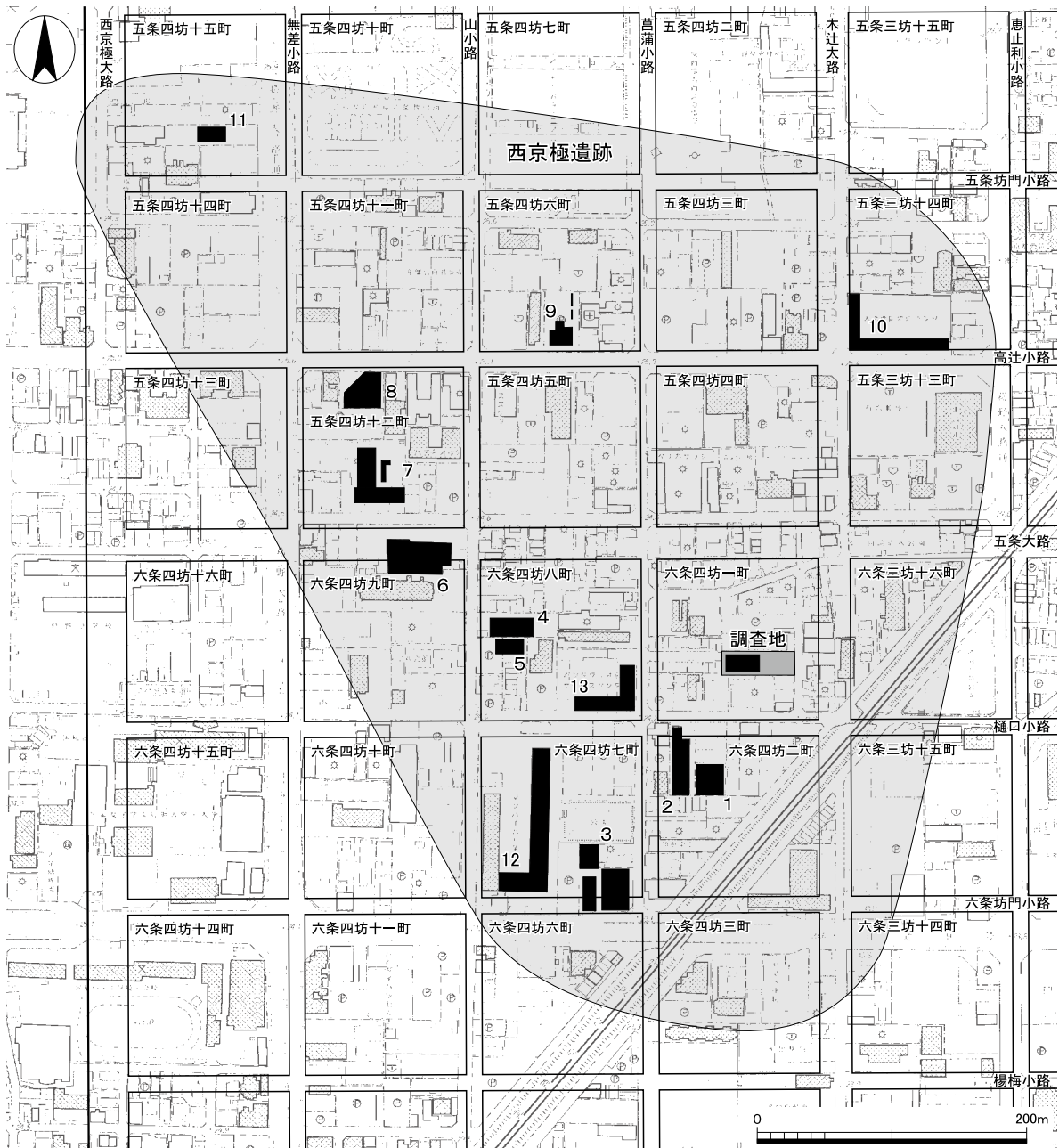


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

跡は、桂川左岸に堆積したシルト層を基盤として南北約700m、東西約650mの範囲にかけて住居と墓が展開し、特に奈良時代には規格性の高い建物群が確認されている。また発掘調査件数が増加したことによって、西京極遺跡の居住域の変遷や消長が判明しつつある。

(2) 周辺の調査 (図5、表1)

西京極遺跡の発掘調査は過去に幾度も行われ、また立会調査や試掘調査も数多く行われたこと²⁾によって成果が得られている。

縄文時代は埋甕などの遺構が検出されており、後期から晩期の遺物が出土している。弥生時代は中期から遺構・遺物が確認されており、遺跡の南部を中心にして居住域が展開している。後期から古墳時代初頭にかけては遺跡の広い範囲で住居が確認され、遺跡北側で方形周溝墓が複数確認さ

表1 周辺調査一覧表

No.	概要	文献
1	縄文時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代後期前半の堅穴建物8棟、古墳時代の堅穴建物3棟、奈良時代の井戸1基、平安時代前期の地鎮遺構1基を検出。弥生時代後期の土器がまとめて出土。	1
2	弥生時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代中期～後期の堅穴建物5棟を検出。	2
3	弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代中期の堅穴建物3棟・溝、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴建物6棟などを検出。 玉類(勾玉・管玉・白玉)が多量に出土。	3
4	縄文時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 古墳時代中期の堅穴建物4棟、古墳時代後期の堅穴建物5棟、奈良時代の総柱建物1棟・堅穴建物3棟、平安時代の掘立柱建物1棟を検出。	4
5	古墳時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 古墳時代中期の堅穴建物4棟、古墳時代後期の堅穴建物6棟、奈良時代の掘立柱建物2棟・堅穴建物2棟・溝2条、平安時代の掘立柱建物1棟・溝1条を検出。小型素文鏡出土。	5
6	縄文時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代～古墳時代の溝、古墳時代後期の堅穴建物3棟、平安時代の五条大路南側溝を検出。	6
7	縄文時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 縄文時代後期前半の埋甕遺構、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴建物12棟、古墳時代中期～後期の堅穴建物26棟、奈良時代～平安時代の掘立柱建物15棟を検出。古墳時代の竈形土器など出土。	7
8	弥生時代～奈良時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代後期の方形周溝墓・堅穴建物、古墳時代後期の溝、飛鳥時代の総柱建物、奈良時代の掘立柱建物を検出。古墳時代後期の溝から三輪玉出土。	8
9	弥生時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴建物11棟・溝、古墳時代中期～後期の堅穴建物7棟・掘立柱建物3棟、奈良時代～平安時代の溝・柱穴を検出。	9
10	弥生時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代中期～後期の方形周溝墓6基、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、平安時代の掘立柱建物4棟・井戸1基を検出。	10
11	古墳時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 古墳時代前期の堅穴建物3棟、古墳時代後期の溝、奈良時代～平安時代の溝を検出。	11
12	弥生時代の遺構・遺物を検出。 弥生時代中期の溝・土坑・流路を検出。	12
13	古墳時代～平安時代の遺構・遺物を検出。 古墳時代の堅穴建物、平安時代の掘立柱建物を検出。	-

れている（図5-8・10）。古墳時代前期は遺跡の北側に偏りやや希薄となるが、中期から後期にかけて再び全域で住居が確認され、水晶製三輪玉や滑石製子持勾玉が出土している。また、玉類の生産遺構の可能性も考えられている（図5-4）。奈良時代には正方位をとる掘立柱建物が複数検出され、小型素文鏡や円面硯などが出土していることなどから、山城国葛野郡衙の候補地に挙げられている。

平安京遷都によって西京極遺跡は平安京に取り込まれることになり、条坊に沿った溝や掘立柱建物が検出されるが、平安時代中期以降の遺構がほとんど確認されていないため10世紀ごろにはすでに宅地として利用されていなかったと考えられている。

註

- 1) 古代学協会編『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 下記文献によって周辺調査事例が悉皆的にまとめられている。柏田有香「IV 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

文献一覧

- 1 柏田有香『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-30 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 2 上村和直・西大條 哲「平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3 「平安京右京六条四坊七町跡」『平安京右京内5遺跡 平安京跡研究調査報告第23輯』財団法人古代学協会 2009年
- 4 柏田有香『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 5 柏田有香「IV 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 6 『平安京右京六条四坊九町・五条大路』京都文化博物館調査研究報告第8集 京都府京都文化博物館 1991年
- 7 家崎孝治・上村憲章『平安京右京五条四坊十二町跡・西京極遺跡』古代文化調査会 2010年
- 8 伊藤 潔「14 平安京右京五条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 9 西森正晃・柏田有香『平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 10 木下保明・西森正晃『平安京右京五条三坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 11 内田真一郎・持田 透『平安京右京五条四坊十五町跡・西京極遺跡』イビソク京都市内遺跡報告第3輯 株式会社イビソク 2012年
- 12 「22 平安京右京六条四坊七町」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

※調査13は未報告

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版3～5)

調査地の現地表は東から西へわずかに傾斜しており、標高は23.62～23.85mである。

現代盛土の下には灰色シルト (図版3-2層) の旧表土が堆積している。旧表土の下には灰黄褐色シルトの耕作土 (図版3-6～10層) が0.4～0.55m堆積している。耕作土の直下は床土の影響で攪拌された堆積土 (図版3-13・14層) があり、これを除去すると地山 (図版3-43～53層) となる。調査区南東や西端に堆積した粘土層は還元化し、青色化している。これは、後世の地下水位の影響によると考えられる

耕作土は2～3段階にわたって堆積しており (図版3-6～10層)、堆積土中から14世紀代の遺物が出土している。Y = -25,246ラインを境に東側の耕作土は、西側の耕作土に比べ0.15m厚くなっており、東西で区画が異なっていたと考えられる。

遺構面は地山の上面で、遺構検出標高は22.52～22.60mである。弥生時代から平安時代の遺構を検出した。そのうち遺構の重複関係において新しく、褐灰色系の明るい埋土を持つ遺構群を平安時代の遺構ととらえ、これを第1期、それ以外のものを第2期として調査した。第2期は弥生時代から飛鳥時代である。検出した遺構総数は150基である。

(2) 第1期 平安時代の遺構 (図版1・6)

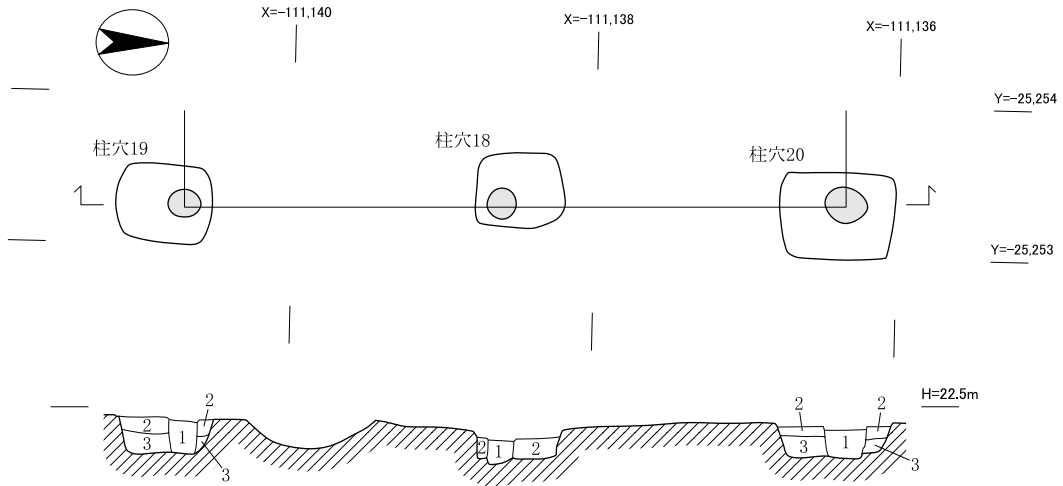
平安時代の遺構は掘立柱建物、溝、土坑を検出した。調査区中心やや西寄り、1町の中央部を南北方位に平行する2条の溝を検出した。1町の東西中心軸を挟んだ位置にあり、町内の「小径」と考えられる。第1期の遺構数は16基である。

掘立柱建物1 (図6、図版6) 調査区西端で検出した。南北2間が東端となり調査区西側へ延長する東西棟と推定される。柱間は2.1～2.3mで、柱穴の掘形は平面が隅丸方形で、平面規模は0.50～0.72m、深さは0.30mである。柱痕の規模は直径0.10～0.15mである。柱穴から遺物の出土はな

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	土坑110	
古墳時代	掘立柱建物3、竪穴建物27・28・32・34・60・63・85・86・96・103・137・138、土坑113	
飛鳥時代	掘立柱建物2、竪穴建物30・62	
平安時代	掘立柱建物1、柱穴列1、柱穴75・89、溝10～15・31、土坑25	溝10と溝11が小径の両側溝と考えられる。
中世	耕作土 (水田)	

掘立柱建物1



柱穴19

- 1 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性あり 細砂混入
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト 炭若干
- 3 10YR6/1 褐灰色シルト

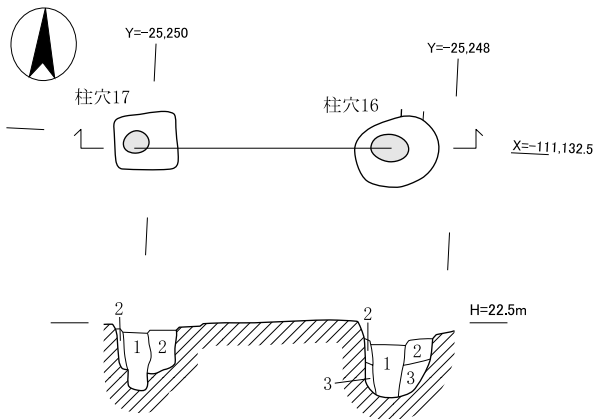
柱穴18

- 1 5G6/1 緑灰色シルト 粘性あり 細砂混入 炭若干
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト

柱穴20

- 1 5G6/1 緑灰色シルト 細砂混入
- 2 5G5/1 緑灰色シルト 細砂混入
- 3 2.5Y5/4 黄褐色シルト 還元化で変色

柱穴列1



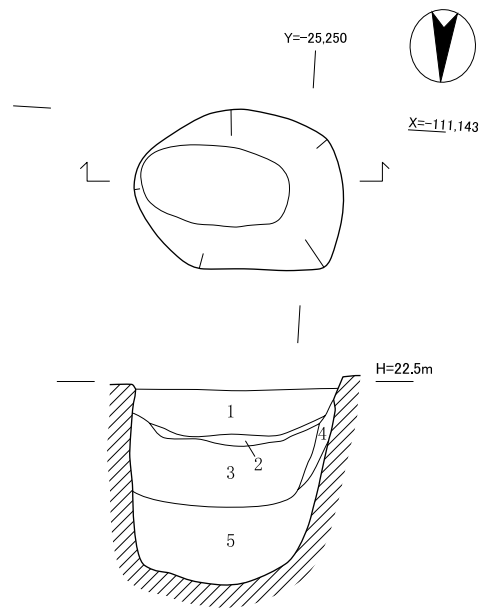
柱穴17

- 1 10YR4/4 褐色シルト 粘性あり 細砂混入
- 2 10YR4/6 褐色シルト 炭若干含む

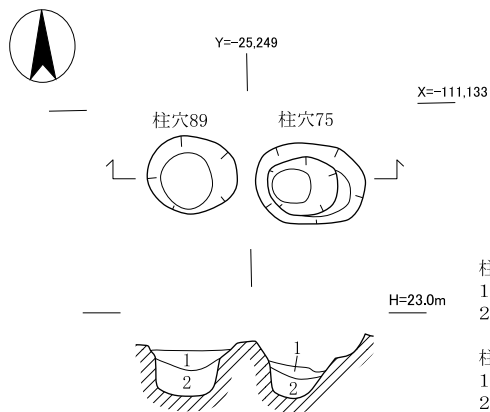
柱穴16

- 1 7.5YR6/1 褐灰色粘土
- 2 7.5YR5/1 褐灰色シルト 細砂混入
- 3 5G6/1 緑灰色シルト 還元化で変色

土坑25



柱穴75・89



柱穴89

- 1 N5/ 灰色粘土 締まり弱い 土器、炭若干含む
- 2 5BG6/1 青灰色粘土 締まり弱い

柱穴75

- 1 10YR6/1 褐灰色粘土 締まり弱い 炭若干含む
- 2 5BG6/1 青灰色粘土 締まり弱い

- 1 10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 2 10YR7/1 灰白色粗砂 φ~1cmの砂礫含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト 崩落土
- 5 5BG6/1 青灰色シルト 炭少量含む



図6 掘立柱建物1、柱穴列1、柱穴75・89、土坑25実測図 (1:50)

いが、条坊の方位に沿うことや平安時代の遺物を含む遺構の埋土と似ることから平安時代の建物と考えられる。

柱穴列1（図6） 調査区西側北で検出した。柱間は1.8mで、柱穴の掘形は平面が隅丸方形で、平面規模は0.38～0.56m、深さは0.50mである。柱痕の規模は直径0.19～0.25mである。柱穴16は溝11と重複し、柱穴16が新しい。柱穴17から平安時代前期の土師器が出土した。

柱穴75（図6） 調査区西側北で検出した。掘形は平面が楕円形で、平面規模は直径0.53m、深さは0.58mである。柱穴75の西側に同様の埋土が堆積した柱穴89が隣接する。

柱穴89（図6） 調査区西側北で検出した。掘形は平面が楕円形で、平面規模は直径0.52m、深さは0.58mである。柱穴89の埋土からは平安時代前期の土師器が出土した。

溝10 幅0.62～1.02m、深さ0.35mで、検出長9.80mを測る南北方位の溝である。調査区の南北に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土した。出土した遺物は小片のため図化していないが、平安時代前期である。

溝11 幅0.52～0.78m、深さ0.16mで、検出長9.60mを測る南北方位の溝である。調査区の南北に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

溝10と溝11は南北に平行する溝で、1町の東西半分を中心に東西幅3mの間隔で位置しており、1町内の「小径」の側溝と考えられる。

溝12 幅0.40～0.46m、深さ0.10mで、検出長3.80mを測る南北方位の溝である。調査区の南北に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

溝13 幅0.36～0.68m、深さ0.15mで、検出長10.80mを測る東西方位の溝である。調査区の東に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

溝14 幅0.40～0.52m、深さ0.13mで、検出長6.54mを測る東西方位の溝である。調査区の西側に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

溝15 幅0.60～0.88m、深さ0.22mで、検出長6.76mを測る東西方位の溝である。調査区の西側に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

溝31 幅0.40～0.45m、深さ0.14mで、検出長3.88mを測る南北方位の溝である。調査区の南北に延長する。埋土から土師器、須恵器が出土したが小片のため図化していない。

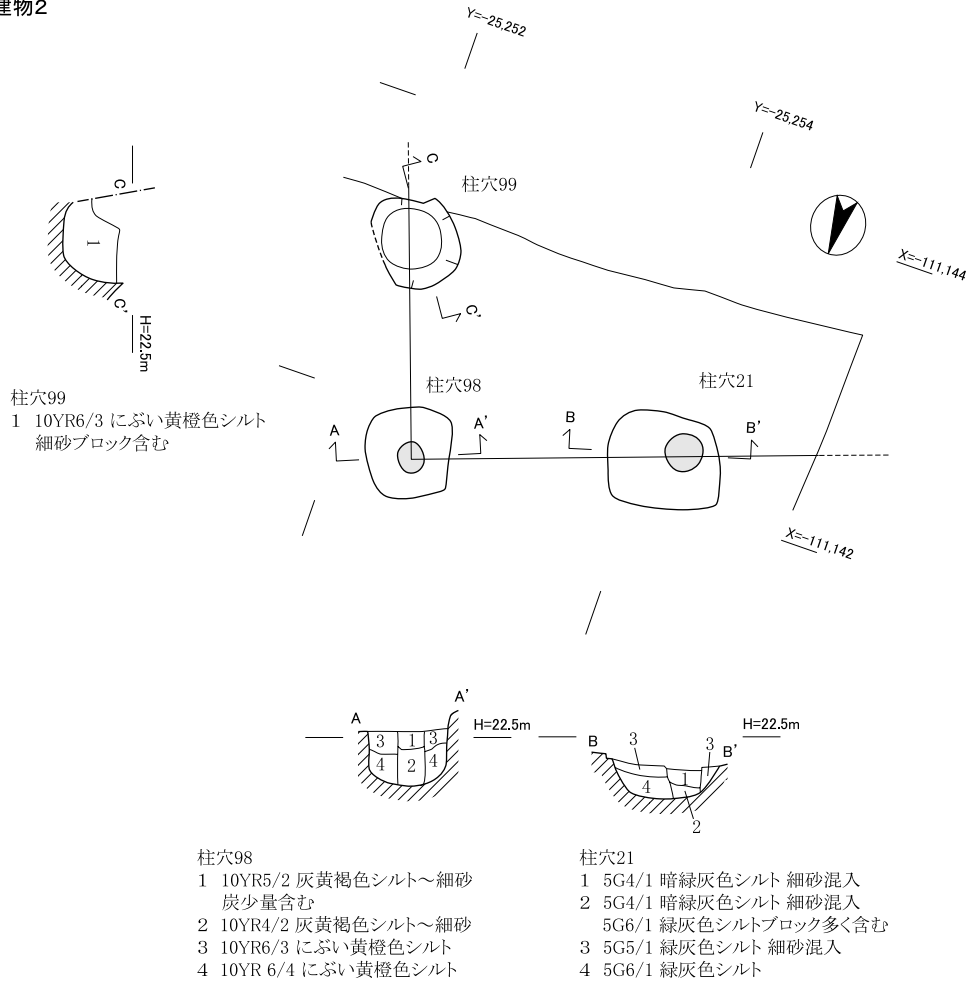
土坑25（図6） 調査区南西で検出した土坑である。平面は楕円形で、短径1.06m、長径1.38m、深さは1.35mである。土坑の最深部は、周辺の地層が粗砂層に変化するところまで掘りぬいており、シルト土の土取り穴の可能性はある。埋土から土師器の小片が出土した。

（3）第2期 弥生時代から飛鳥時代の遺構（図版2・7）

弥生時代から飛鳥時代の遺構は、第1期とした平安時代の遺構面と同一面で検出した。掘立柱建物、竪穴建物、土坑などを検出した。特に竪穴建物は複数棟を重複して検出した。第2期の遺構数は134基である。

掘立柱建物2（図7） 調査区南西で検出した。北東角のみを検出しており建物規模は不明であ

掘立柱建物2



柵1

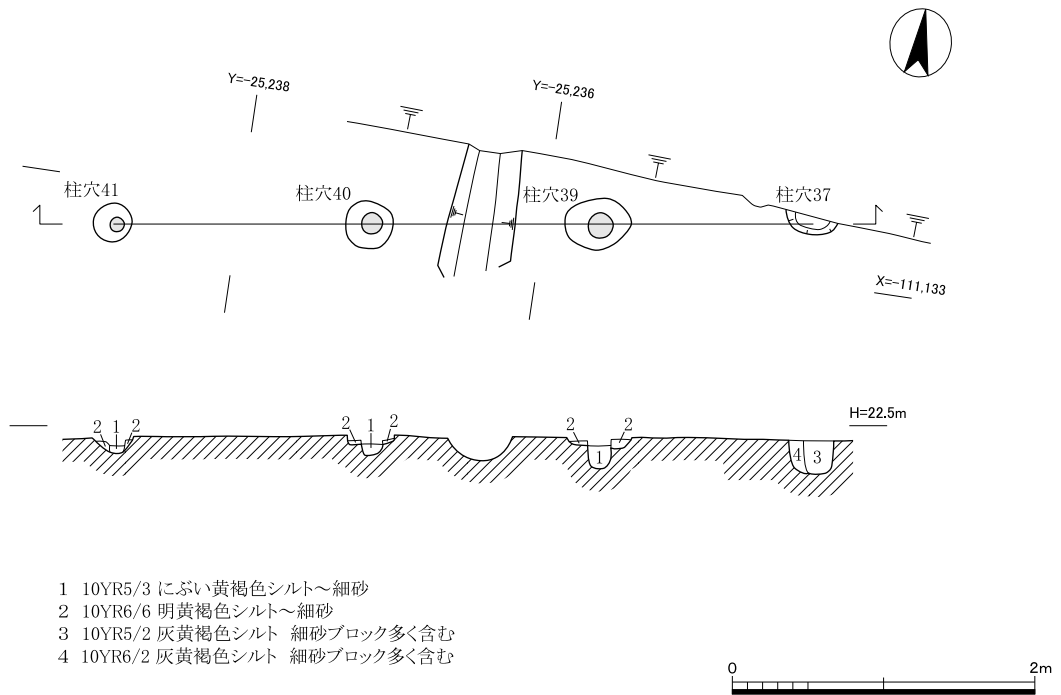


図7 掘立柱建物2、柵1実測図(1:50)

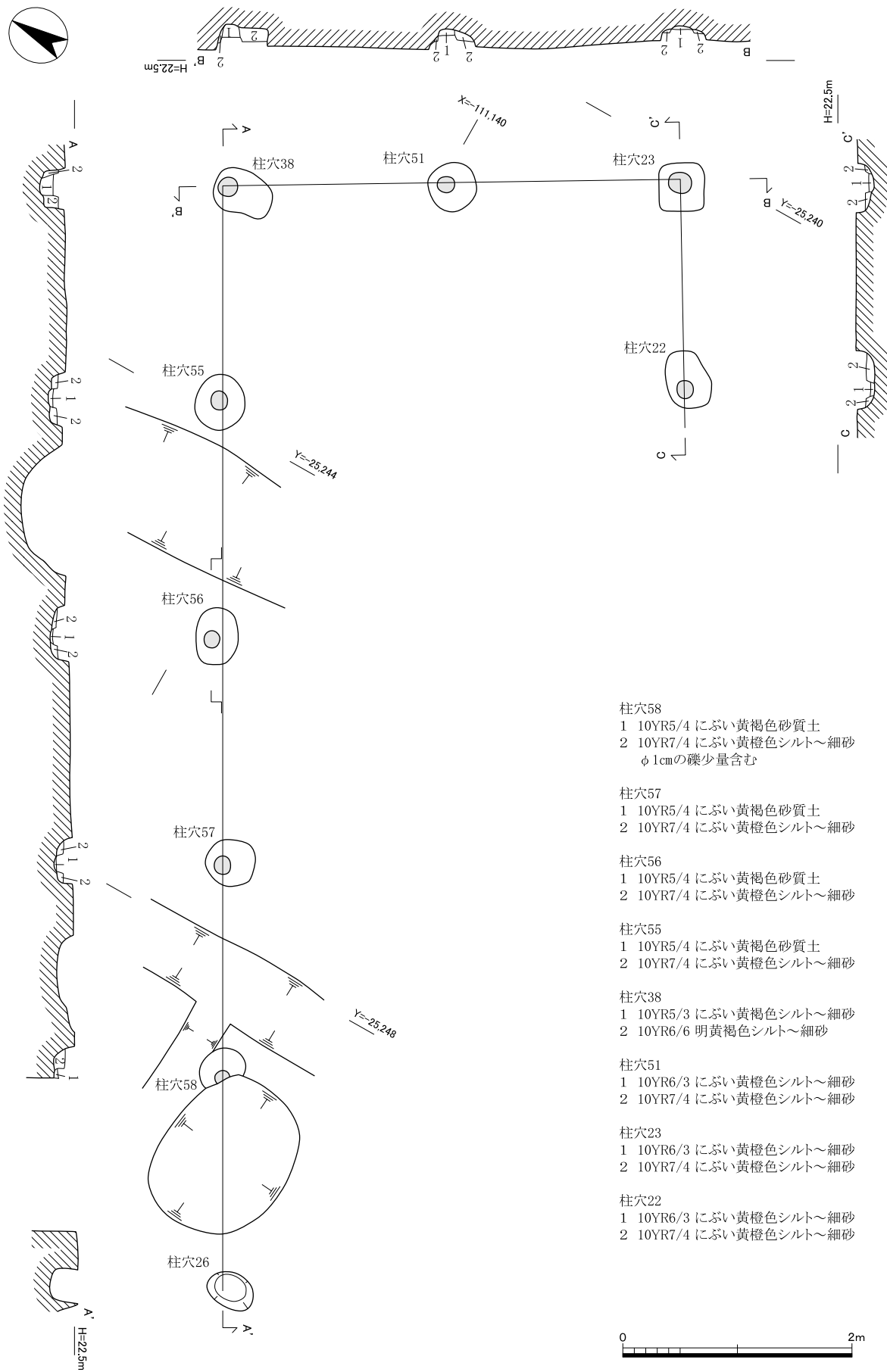


図8 掘立柱建物3実測図 (1 : 50)

る。柱間は1.8mで、柱穴の掘形は平面が隅丸方形で、平面規模は0.60～0.62m、深さは0.32～0.46mである。柱痕の規模は直径0.20mである。

柱穴21の掘形から飛鳥時代の土師器が出土した。

掘立柱建物3（図8、図版6） 調査区中央南で検出した。梁行2間、桁行5間以上の建物である。柱間は1.9～2.1mで、柱穴の掘形は平面が隅丸方形で、平面規模は0.38～0.50m、深さは0.14～0.22mである。柱痕の規模は直径約0.2mである。建物方位はW40°Nである。

柱穴の埋土から古墳時代後期の土師器や須恵器が出土したが小片のため図化していない。

柵1（図7） 調査区北東寄りで検出した。柱間は1.4～1.6mで、柱穴の掘形は平面が隅丸方形で、平面規模は0.25～0.48m、深さは0.10～0.22mである。柱痕の規模は直径0.20mである。柵が東側に延長する可能性や北側に対応する柱列があり、掘立柱建物になる可能性もある。

竈53（図9） 調査区南東で検出した。調査区壁面で確認した竪穴建物に伴うものと考えられる（図版4 - 南壁18層、図版5 - 東壁18層）。床面の被熱部分と掘形を検出した。被熱面の範囲は0.5mである。

竪穴建物30（図10、図版7） 調査区北東で検出した。平面形は方形で、東西2.58m、南北2.64m、検出面からの深さは0.10mである。建物の方位はN15°Wである。建物内部の施設は検出できなかった。埋土はにぶい黄橙色シルトである。

建物埋土からは土師器の長胴甕などが出土した。

竪穴建物62（図10） 調査区北西で検出した。平面形は方形で、一辺約3.3m、検出面からの深さは0.2mである。ほぼ正方位の竪穴建物である。建物内部の施設は検出できなかった。

建物埋土からは土師器・須恵器が出土したが小片のため図化していない。

竪穴建物60（図11、図版12） 調査区中央西寄りで検出した。平面形は方形で、東西5.1m、南北4.7m、検出面からの深さは0.10mである。建物の方位はN12°Wである。主柱穴（柱穴83・84）の掘形は平面楕円形で、径0.30～0.38m、柱痕は径0.18mである。壁溝は北辺中央を除き全周し、幅0.10m、深さ0.04mである。床面の一部で硬化した貼床を確認した。

建物の北辺中央で竈の痕跡と考えられる被熱面と掘形を検出した（竈61）。被熱面の周辺には竈の上部構造構築土を確認することができなかった。被熱面の範囲は約0.5mである。また、貼床除去後に北西隅で落ち込み（土坑112）と竈61の南東側で土坑97（平面規模は短径0.56m、長径0.60m、深さ0.21m）を検出した。

柱穴83から土師器が出土した。また、建物埋土から土師器・須恵器・石器が出土した。

竪穴建物32（図12） 調査区北東隅で検出した。調査区の北東方位へ延長する。平面形は方形

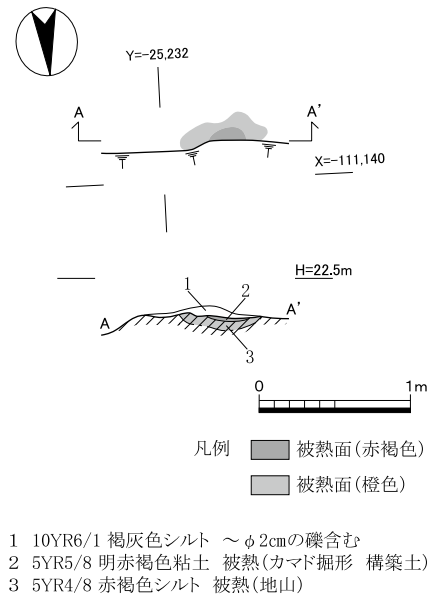
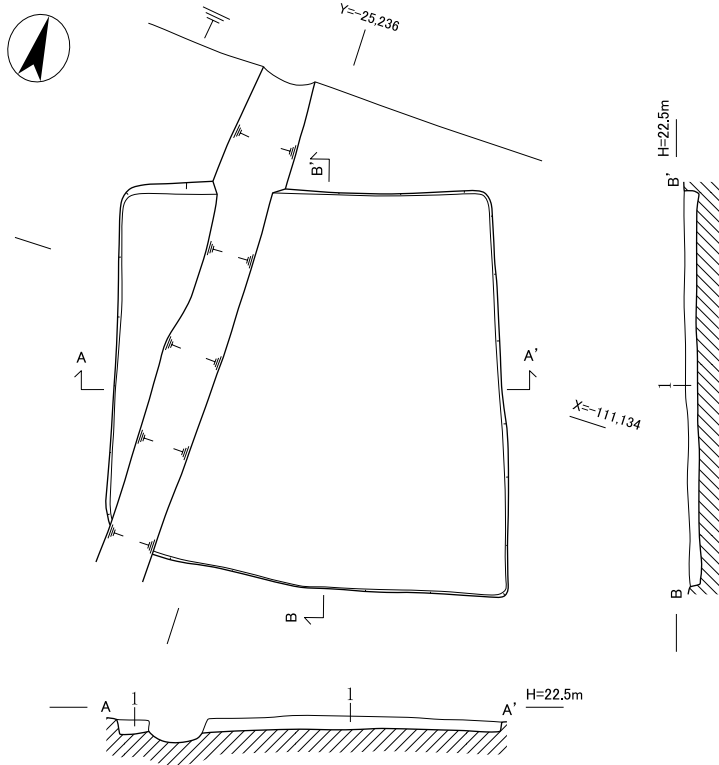


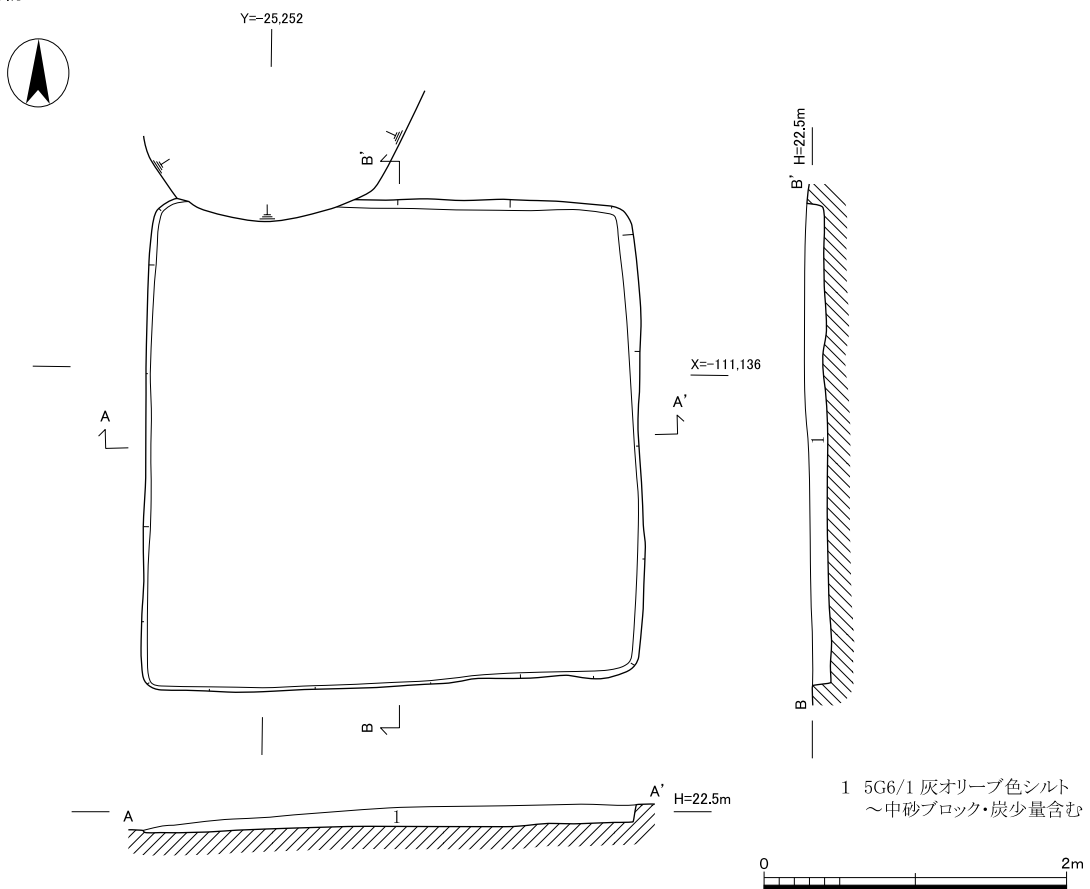
図9 竈53実測図（1：50）

竖穴建物30



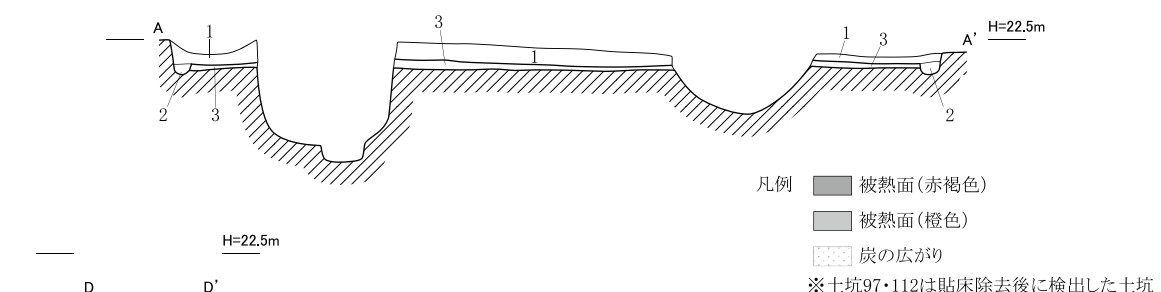
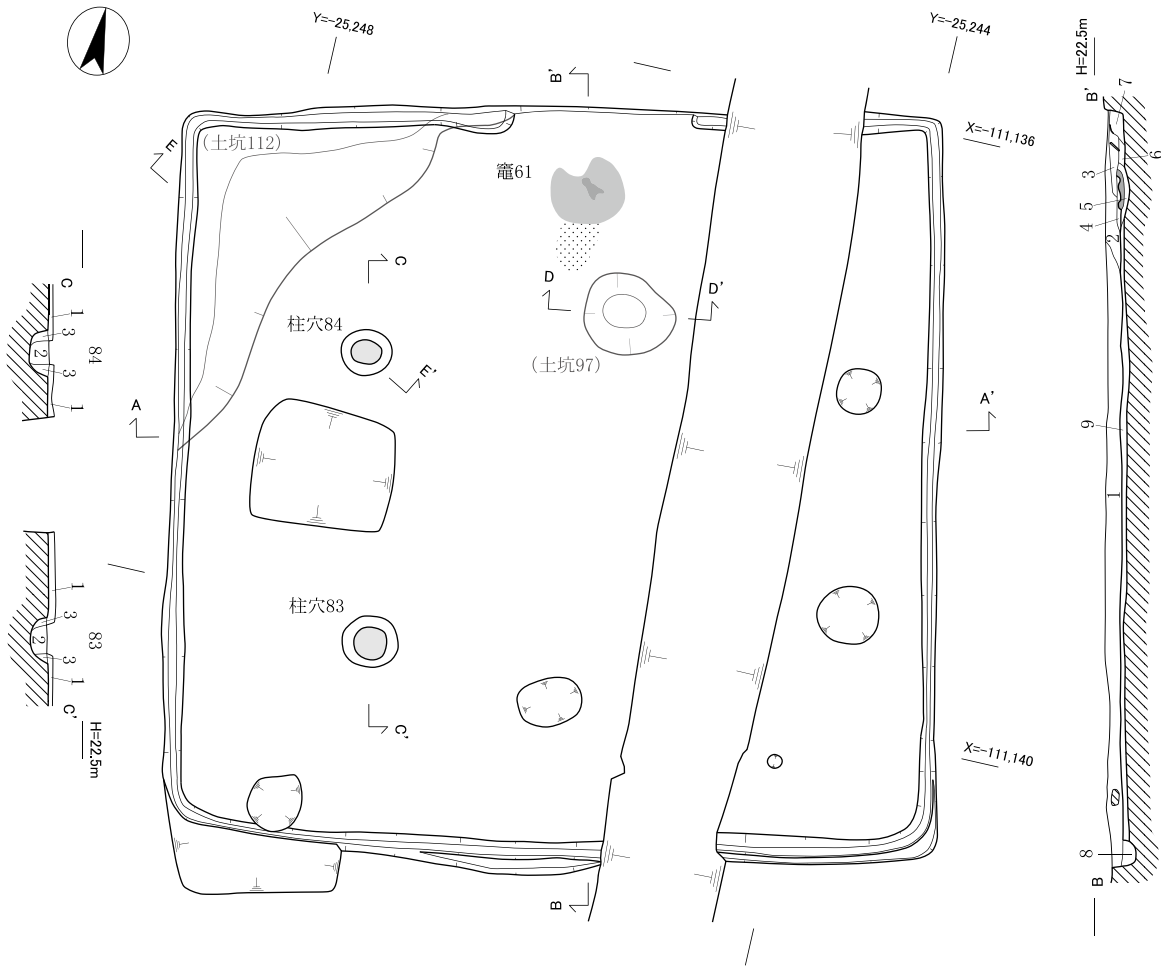
1 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
灰白色土ブロック少量含む

竖穴建物62



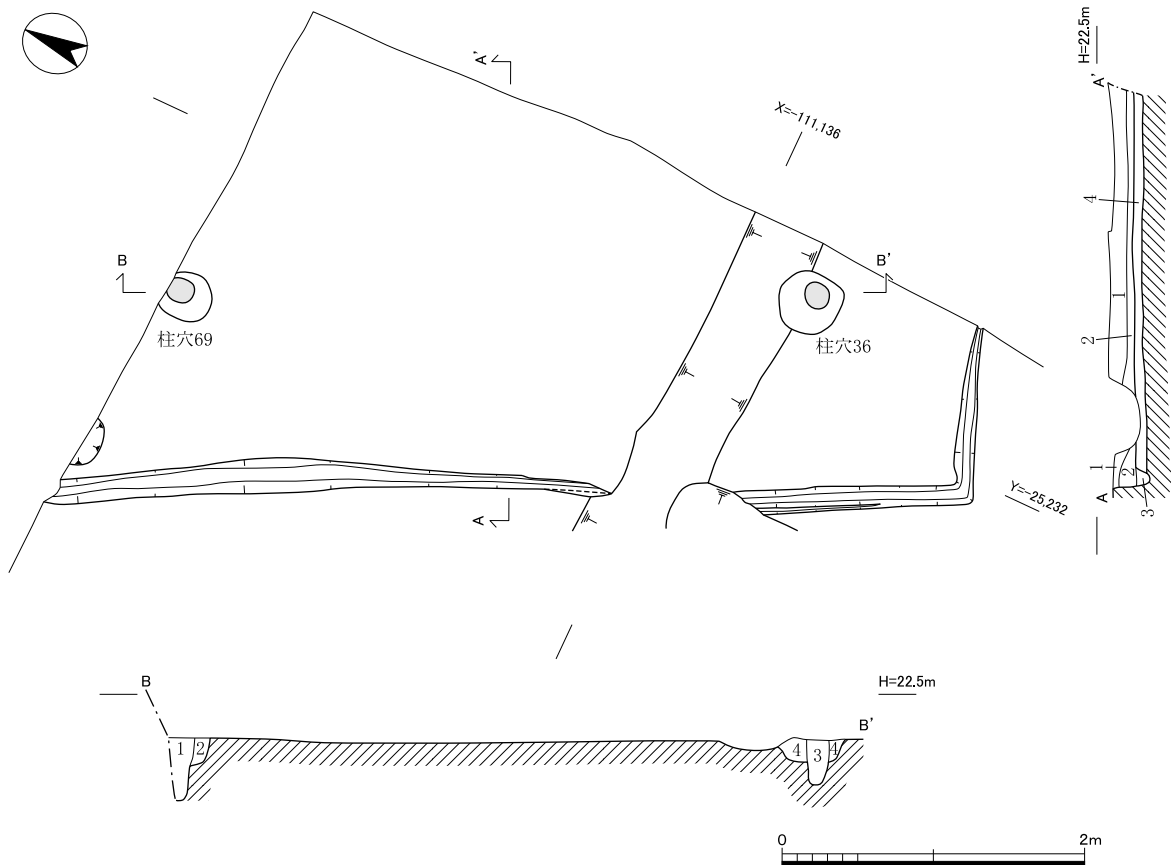
1 5G6/1 灰オリーブ色シルト
～中砂ブロック・炭少量含む

図10 竖穴建物30・62実測図 (1 : 50)



- A断面**
- 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～中砂 ～φ3cmの礫少量含む
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト細砂(壁溝埋土)
 - 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～細砂 ～φ3cmの礫少量含む(貼床)
- B断面**
- 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～中砂 ～φ3cmの礫少量含む
 - 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～細砂 炭、焼土、若干含む
 - 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト～細砂 焼土ブロック少量含む
 - 10YR2/1 黒色シルト 炭を多く含む
 - 10YR6/2 灰黄褐色シルト 上位に固く締まった焼土塊あり 焼土ブロック多く含む
 - 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト細砂 焼土ブロック若干含む
 - 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト～細砂 灰黄褐色シルトブロック若干含む
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト細砂(壁溝埋土)
 - 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～細砂 ～φ3cmの礫少量含む(貼床)
- C断面**
- 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～細砂 ～φ3cmの礫少量含む(貼床)
 - 10YR7/6 黄褐色細砂
 - 10YR6/6 明黄褐色シルト 細砂混入
- D断面(土坑97)**
- 10YR4/3 褐色砂質土 土器、炭多く含む
 - 10YR4/1 褐色砂質土 炭若干含む
- E断面(土坑112)**
- 10YR5/2 灰黄褐色シルト 炭～φ3cmの礫少量含む

図11 竪穴建物60実測図 (1:50)



B断面(貼床除去後)

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂
- 4 10YR4/4 褐色シルト～細砂

A断面

- 1 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 細砂ブロック含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック含む(壁溝埋土)
- 4 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 土器少量含む(貼床)

図12 竪穴建物32実測図(1:50)

で、検出長は東西1.30m、南北6.08m、検出面からの深さは0.15mである。建物の方位はN23°Wである。主柱穴(柱穴36・69)は平面楕円形の掘形で、径0.30～0.42m、柱痕は径0.16mである。やや締まる貼床を確認し、床面中央で少量の炭の広がりを検出した。

建物埋土からは土師器が出土したが小片のため図化していない。

竪穴建物28(図13・14、図版8) 調査区東で検出した。竪穴建物30によって壊されている。平面形は方形で、規模は短辺5.8m、長辺6.1m、検出面からの深さは0.05～0.25mである。建物の方位はN45°Wである。建物の北辺中央で竈を検出した(竈54)。竈は長軸0.89m、短軸0.86mで、竪穴建物の床面からの高さは0.28mの高さが残存していた。竈中央の床面は強く被熱していた。竈の袖は撥状に開く。竈を構築する土は埋土と比較すると砂質が強い。竈中心部の埋土中から土師器甕が出土した。主柱穴(柱穴64～66・68)は平面楕円形の掘形で、径0.31～0.50m、柱痕は径0.20mである。貼床が施してあり、特に竈54付近で床面が固く締まる。壁溝は深さ0.05mで北辺中央にある竈や南辺を除いてほぼ全周する。

建物の南辺中央寄り土坑67を検出した。検出部分は残存する埋土がほとんど除去されていたため、貼床面から成立していた遺構かどうかは不明である。平面は楕円形で、南北0.60m、東西

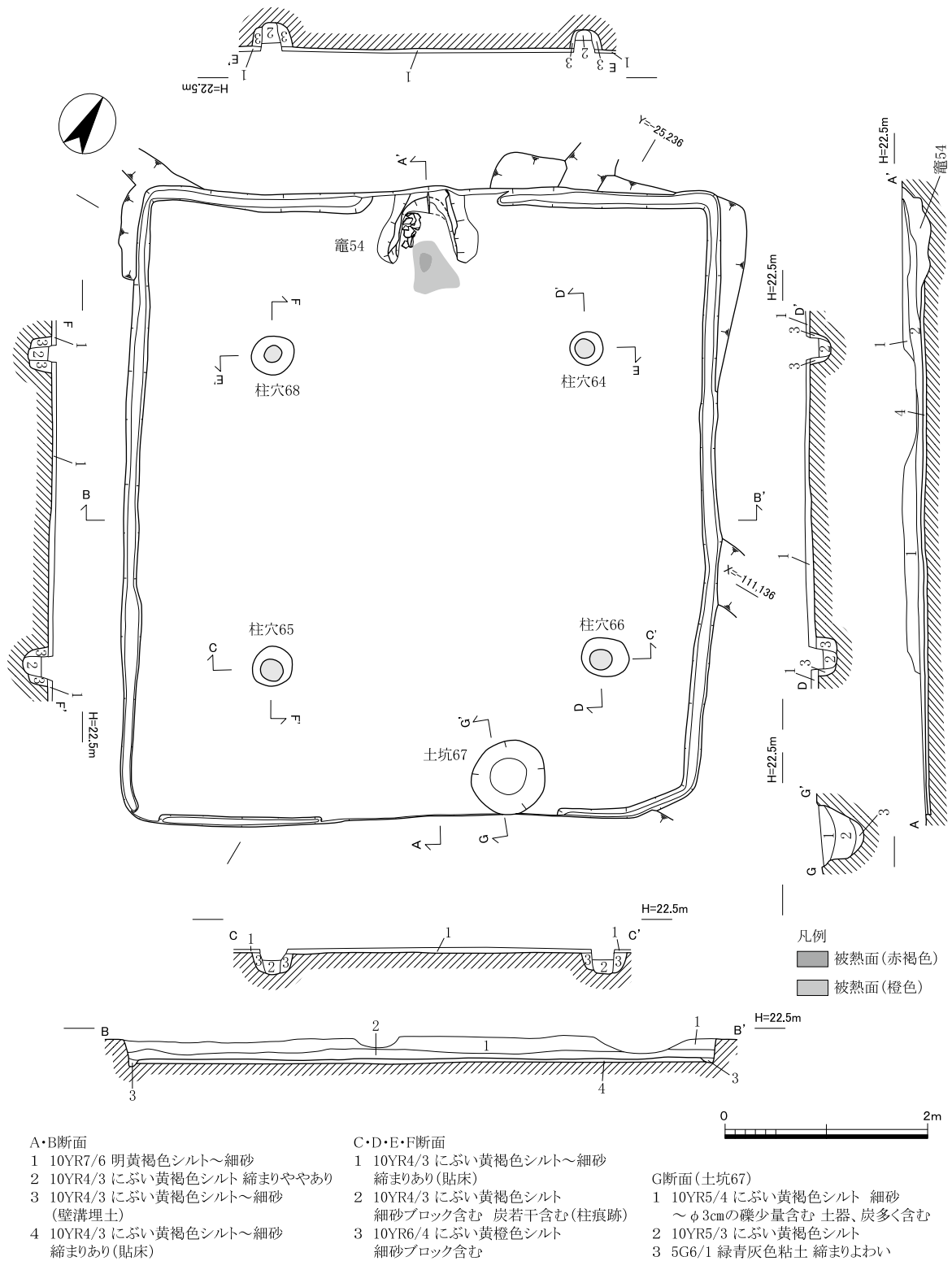


図13 竪穴建物28実測図(1:60)

0.72m、深さ0.42mである。上層に炭と共に土器が堆積していた。建物に伴う貯蔵穴と考えられる。

1層から土師器鉢と須恵器杯身が出土した。

竈54からは土師器が出土した。建物埋土からは土師器が出土したが小片のため図化していない。

竪穴建物103(図15、図版9) 調査区中央南で検出した。竪穴建物60・85によって壊され、方

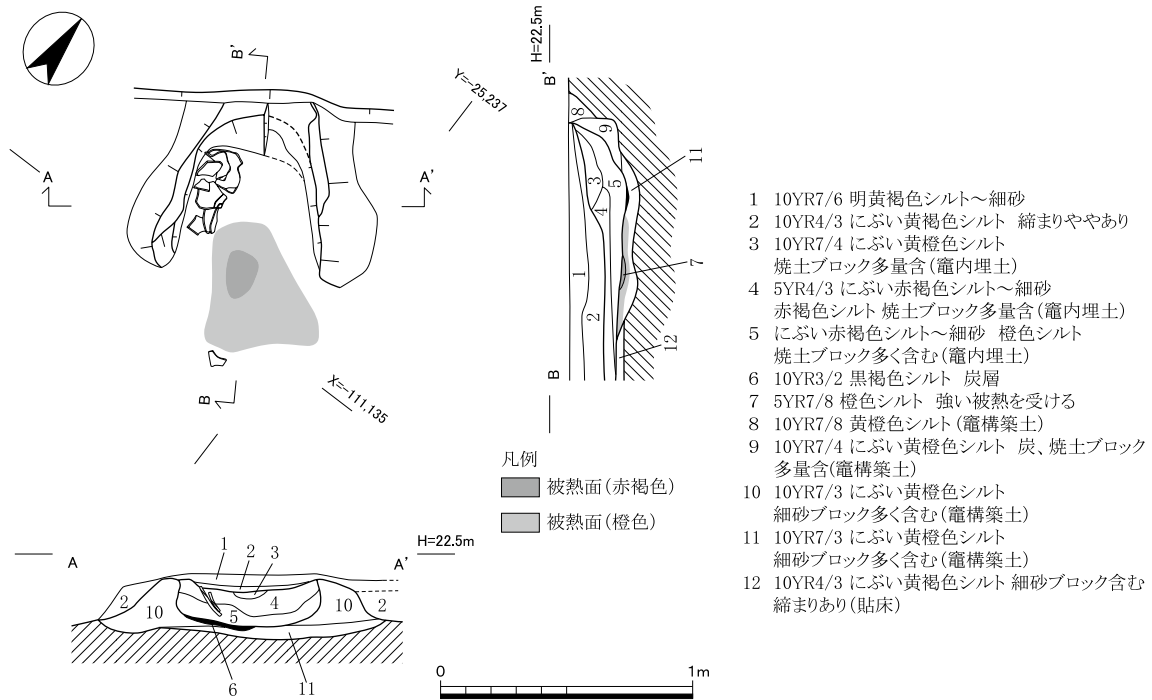


図14 竈54実測図 (1 : 30)

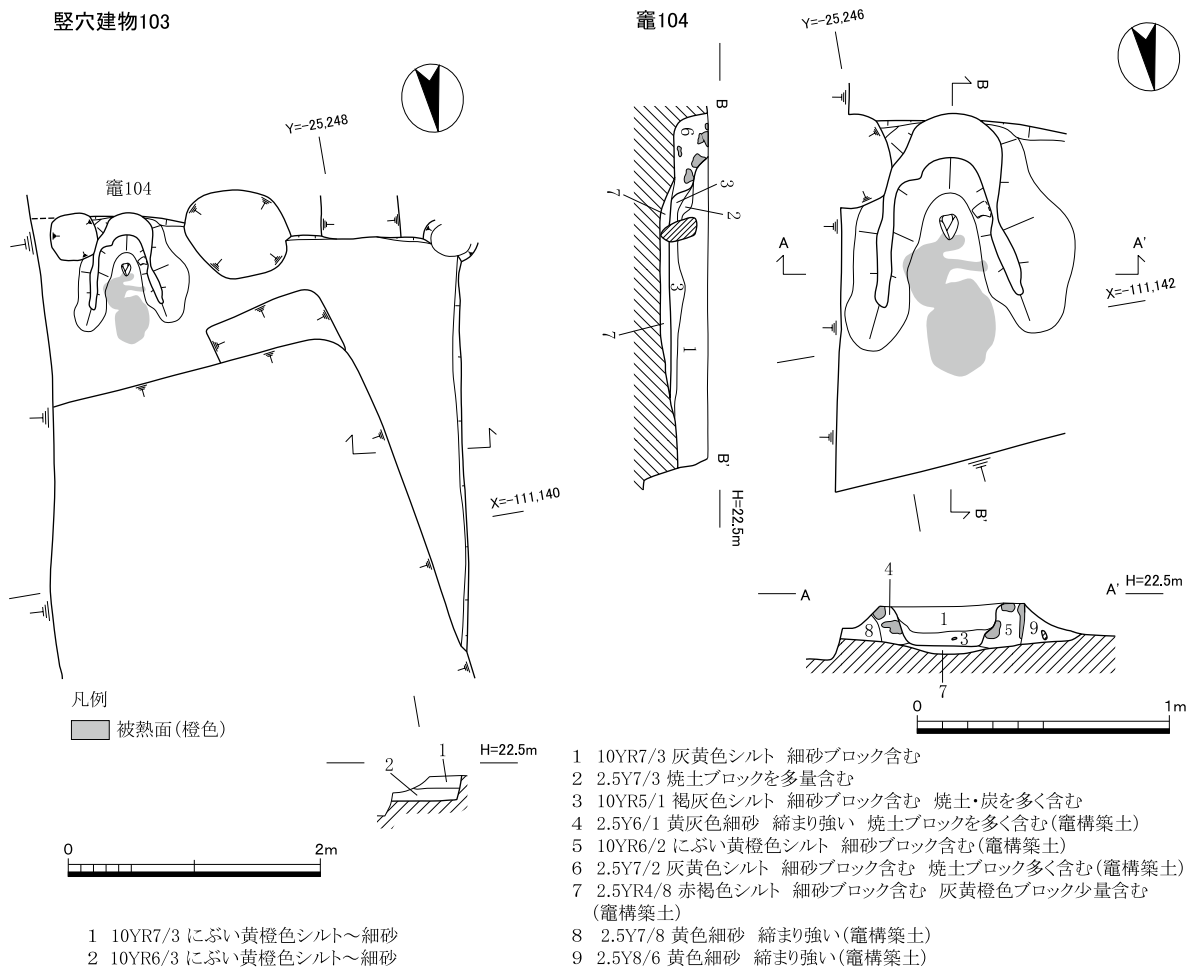
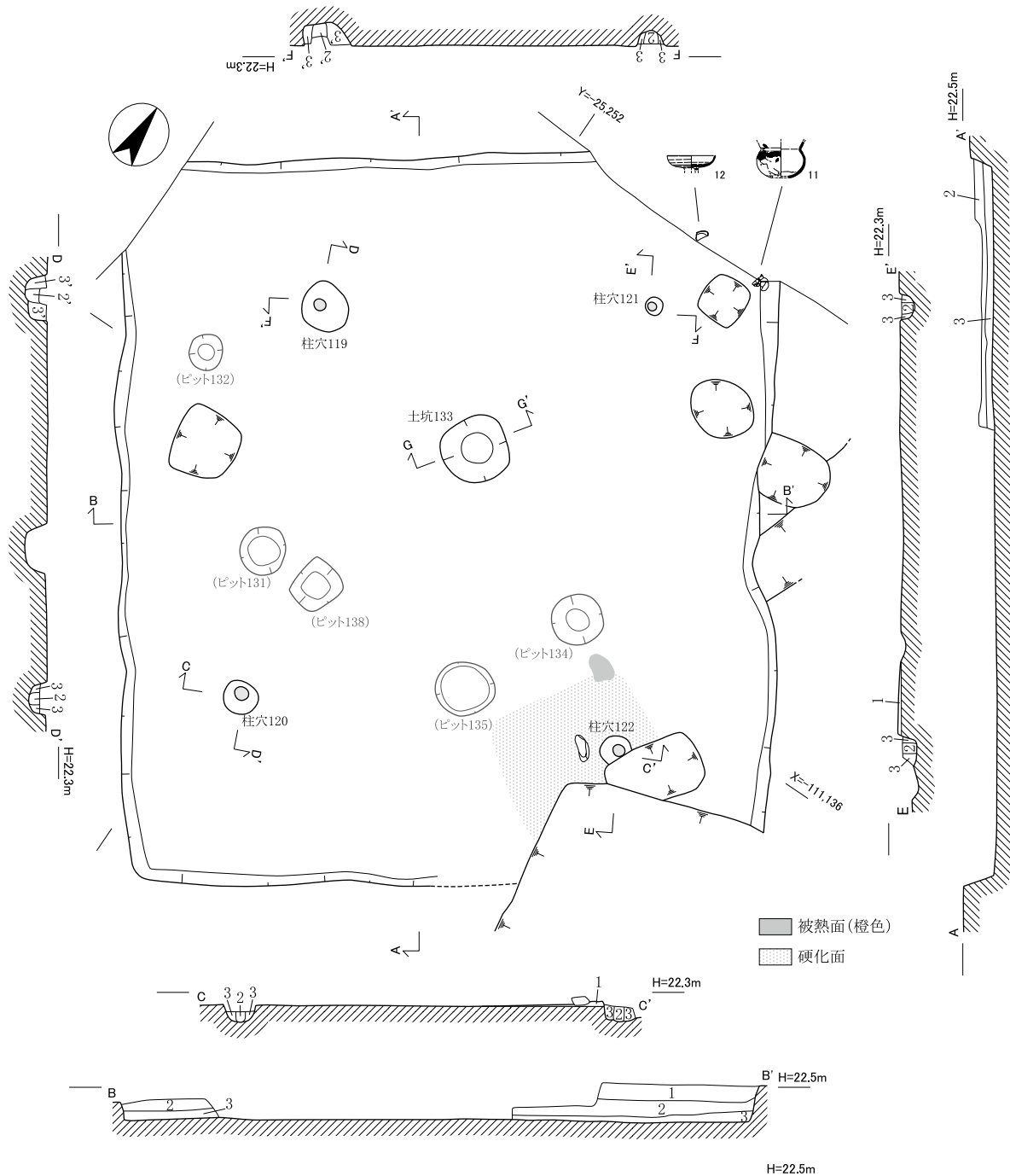


図15 竈103・竈104実測図 (1 : 60、1 : 30)



- A・B断面
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 細砂ブロック多く含む 炭、土器片若干含む
 - 2 灰オリーブ色シルト 細砂ブロック多く含む
 - 3 5B5/1 青灰色シルト 細砂ブロック多く含む
- C・D・E・F断面
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む 非常に固く締まる
 - 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む
 - 2' 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 細砂ブロック多く含む
 - 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む
 - 3' 5BG6/1 緑灰色シルト 細砂ブロック多く含む

- G断面(土坑133)
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む 土器含む
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 青灰色シルト ブロック多く含む

※ピット131・132・134・135・138は貼床除去後に検出したピット

図16 竪穴建物86実測図 (1 : 60)

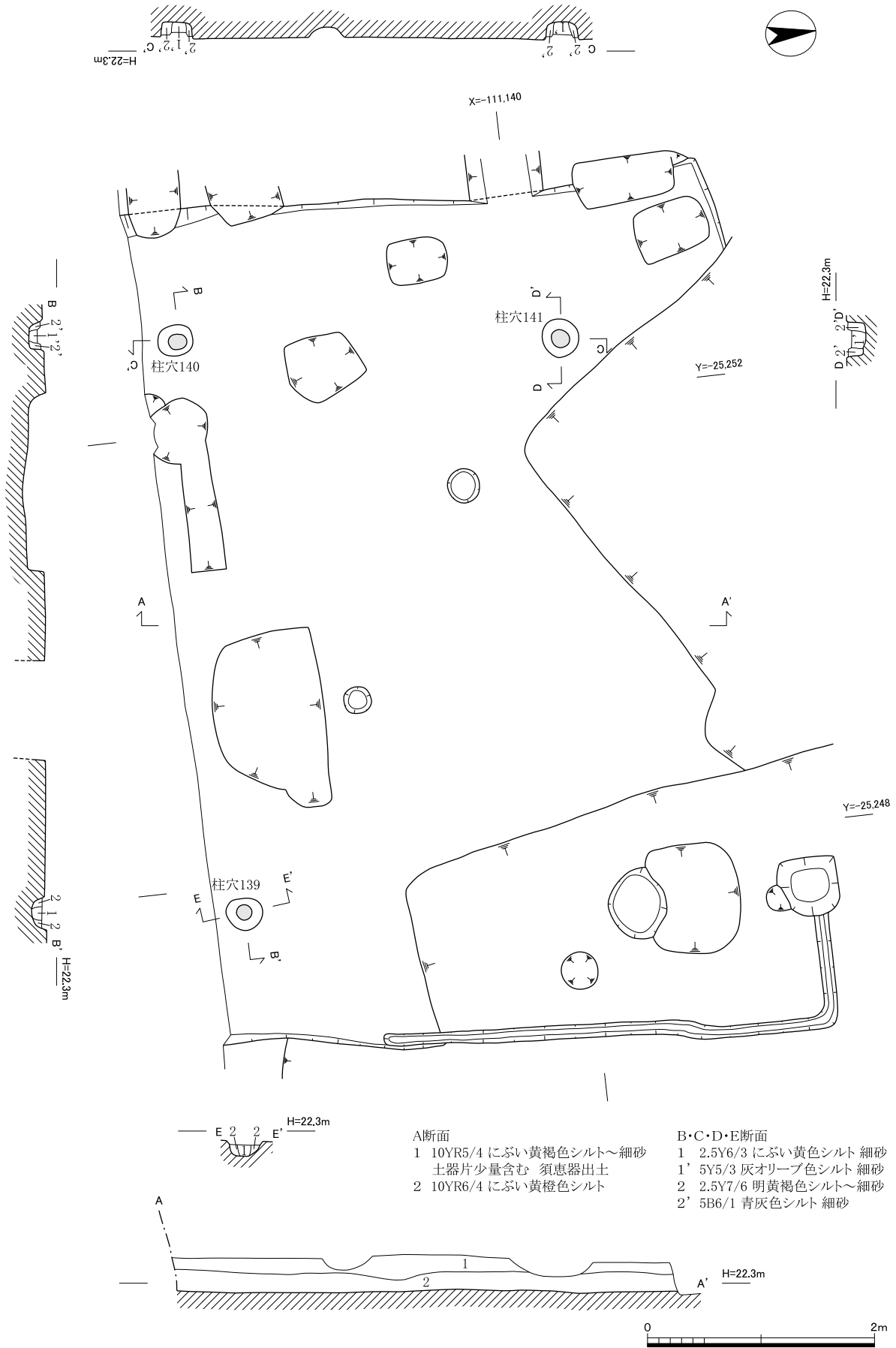


図17 竪穴建物137実測図 (1 : 50)

形と考えられる建物の南西部のみを検出した。平面形は方形で、検出長は東西3.06m、南北3.10m、検出面からの深さは0.14mである。建物の方位はN9°Eである。

建物南辺で竈を検出した（竈104）。竈は長軸0.90m、短軸0.90mで、高さは0.18m残存していた。竈中央の覆土を除去すると強く被熱した床面と支柱石を検出した。竈を構築する土は覆土と比較すると砂質が強い。竈構築土のうち竪穴建物床面付近で炭の広がり確認できることから竈を作り変えている可能性がある。構築土中から土師器片、埋土中からも土師器片が出土した。

竈の構築土や建物埋土から土師器片が出土したが、小片のため図化していない。

竪穴建物86（図16、図版9） 調査区北西で検出した。竪穴建物60・62によって壊されている。平面形は方形で、短辺5.95m、長辺6.75m、検出面からの深さは0.16mである。建物の方位は、N35°Wである。支柱穴（柱穴119～122）はいずれも平面楕円形の掘形で、径0.30～0.45m、柱痕は径0.12mである。壁溝は南西辺のみ確認でき、幅0.11m、深さ0.06mである。床面の南東部の一部で非常に締まった硬化面と作業台と考えられる石皿を確認した。

建物の中央付近の床面で土坑133を検出した。平面は楕円形で、短軸0.63m、長軸0.65m、深さ

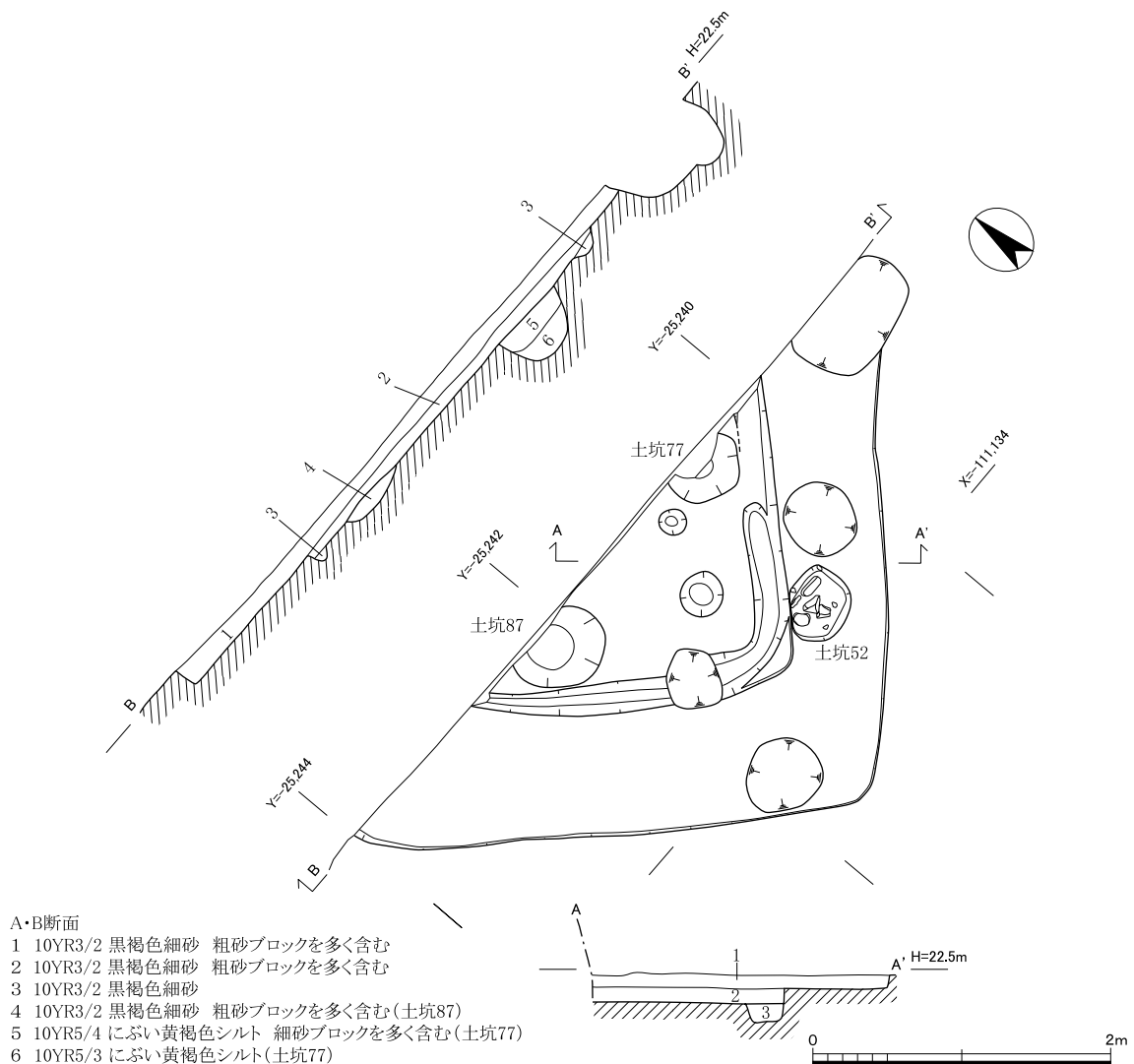


図18 竪穴建物34実測図（1：50）

0.50 mである。建物に伴う中央土坑と考えられる。土坑埋土から土師器が出土した。

建物埋土からは土師器・須恵器が出土した。

竪穴建物137 (図17) 調査区南西で検出した。調査区の南方位へ延長する。竪穴建物60・86によって壊されている。平面形は方形で、東西5.12 m、南北7.32 m、検出面からの深さは0.18 mである。建物の方位はN 3° Eである。支柱穴(柱穴139~141)は平面楕円形の掘形で、径0.27~0.32 m、柱痕は径0.14 mである。壁溝は東辺のみ確認でき、幅0.10 m、深さ0.05 mである。

建物埋土からは古墳時代後期の土師器・須恵器・石器が出土した。

竪穴建物34 (図18、図版11) 調査区中央北で検出した。平面形が方形で、検出長が短軸3.00 m、長軸3.52 m、検出面からの深さは0.08 m、中央部の深さが0.13 mである。建物の方位はN 44° Wである。周縁が一段高く、中央が低いベッド状となっている。建物に伴う施設は土坑(土坑77・87)があり、貯蔵穴の可能性はある。支柱穴は確認できなかった。建物の南で検出した土坑52は、0.42~0.50 m、深さ0.05 mの浅い土坑で、川原石が平面的にまとまっていた。

建物埋土からは土師器が出土したが小片のため図化していない。

竪穴建物27 (図19、図版10) 調査区東側で検出した。東西3.92 m、南北2.20 mを検出した。検出面からの深さは0.12 mで、調査区の南側に延長する。建物の方位はN 4° Wである。床面全体で貼床を確認した。

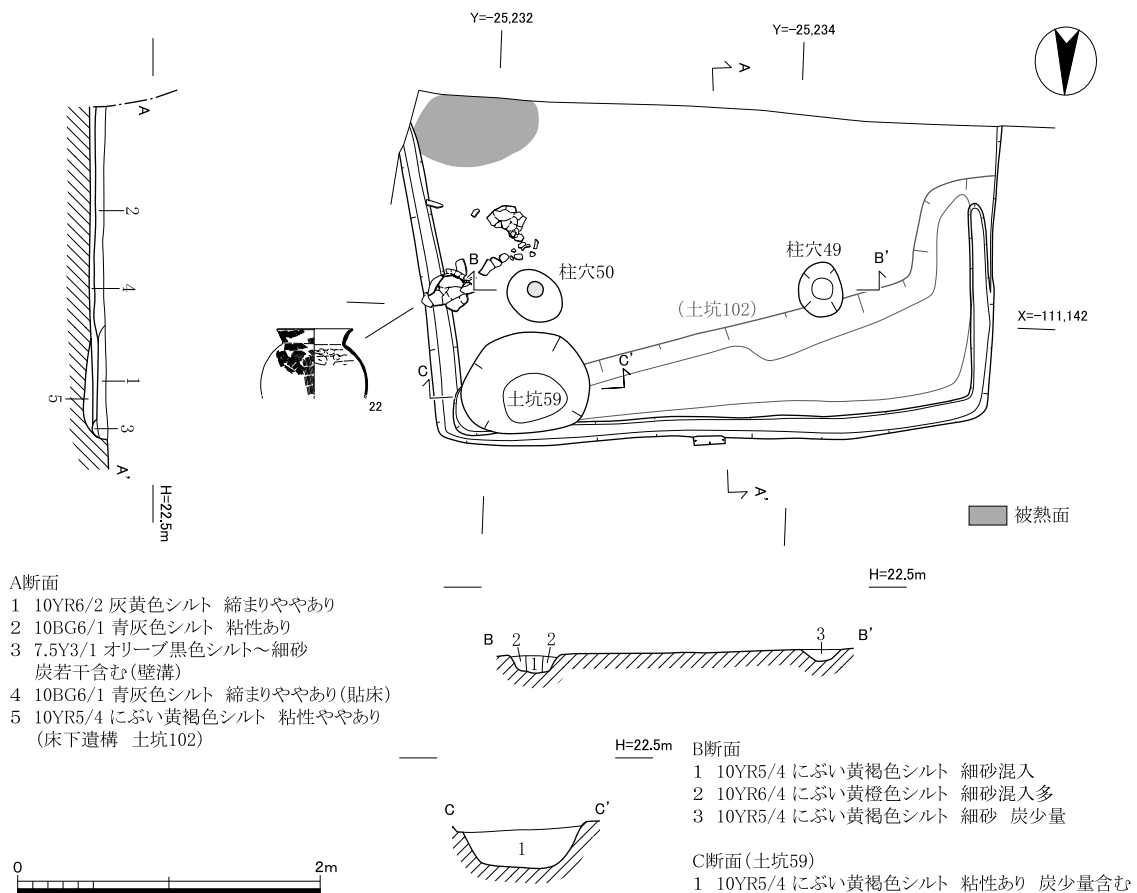


図19 竪穴建物27実測図(1:50)

北東隅で貯蔵穴と考えられる土坑59を検出した。平面は楕円形で、平面規模は短軸0.65m、長軸0.85m、深さ0.34mである。埋土から土師器が出土したが小片のため図化していない。東壁際で床面の一部が被熱して赤化していた。主柱穴（柱穴49・50）の柱間は芯々で2.0mである。柱穴の規模は径0.30～0.42m、深さは0.13mである。柱痕は径0.12mである。

貼床を除去すると、柱穴の掘形とともに北辺に沿ったコの字状土坑102を検出した。深さは0.22mである。

床面直上と建物埋土から土師器が出土した。

竪穴建物63（図20、図版10・11） 調査区中央で検出した。竪穴建物28によって壊されている。

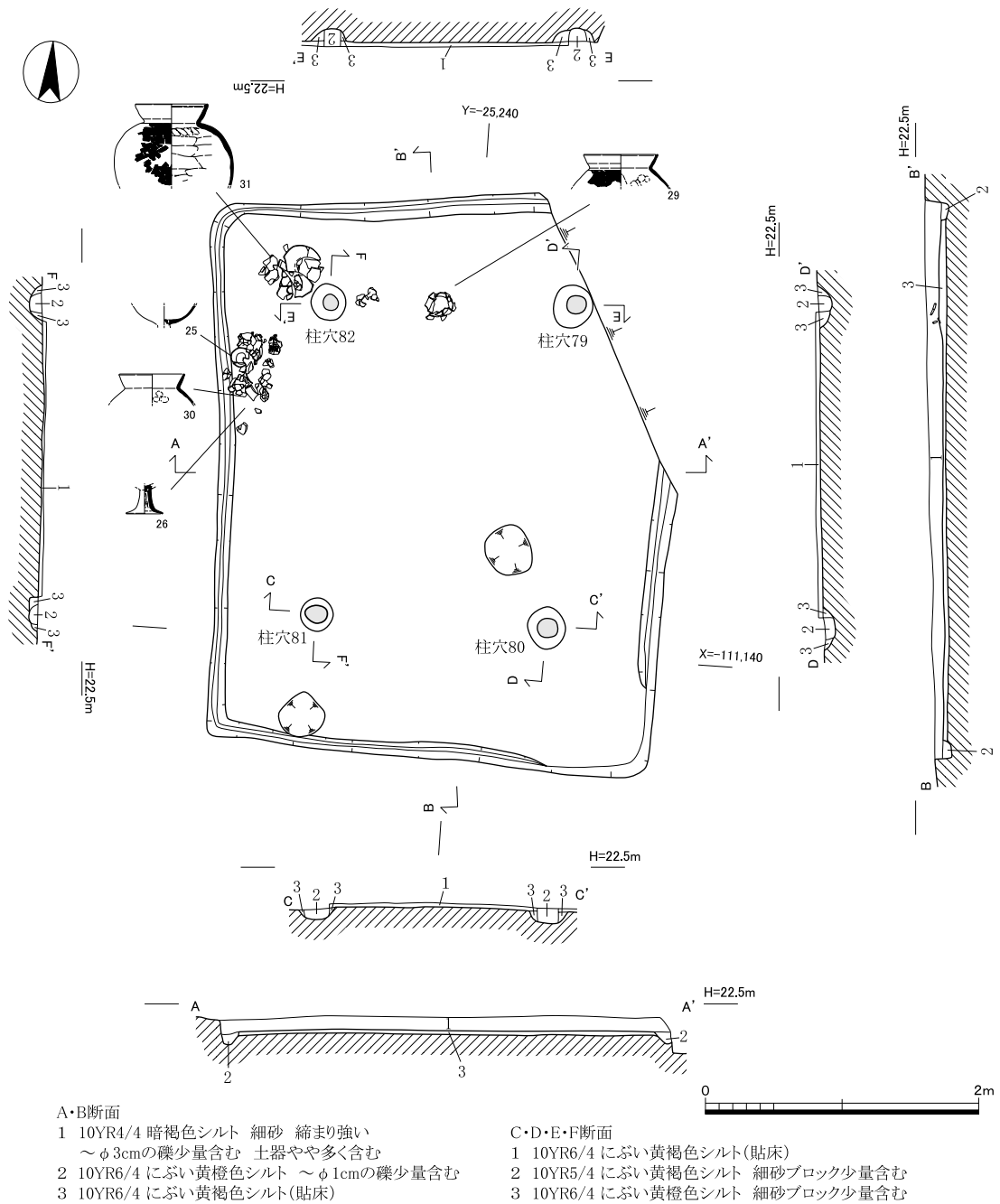


図20 竪穴建物63実測図（1：50）

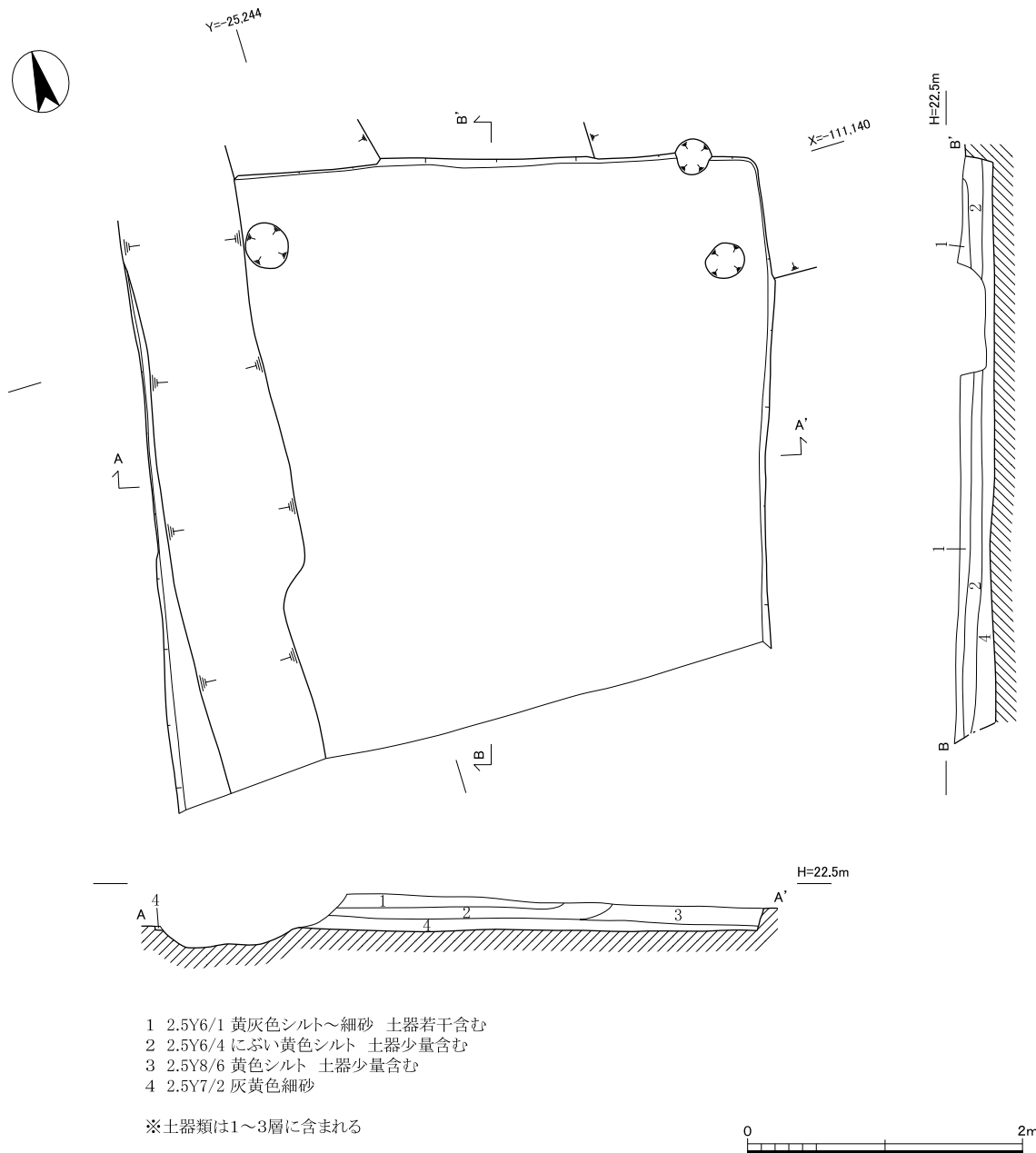


図21 竪穴建物85実測図（1：50）

平面形は方形で、短辺3.25m、長辺4.10m、検出面からの深さは0.20mである。建物の方位は、N 2° Wである。支柱穴（柱穴79～82）は平面楕円形の掘形で、径0.22～0.32m、柱痕は径0.11～0.17mである。床面と考えられるやや硬化した床面の上に土器群が広がっていた。

床面直上と建物埋土からは古墳時代の土師器が出土した。

竪穴建物85（図21） 調査区中央南で検出した。竪穴建物60・63によって壊されている。調査区の南方向へ延長する。平面形は方形で、検出長は東西3.50m、南北4.02m、検出面からの深さは0.32mである。建物の方位はN 18° Eである。建物に伴う施設は確認できなかった。

建物埋土からは古墳時代の土師器が出土した。

竪穴建物96（図22） 調査区南東で検出した。竪穴建物27・28、土坑93によって壊されている。

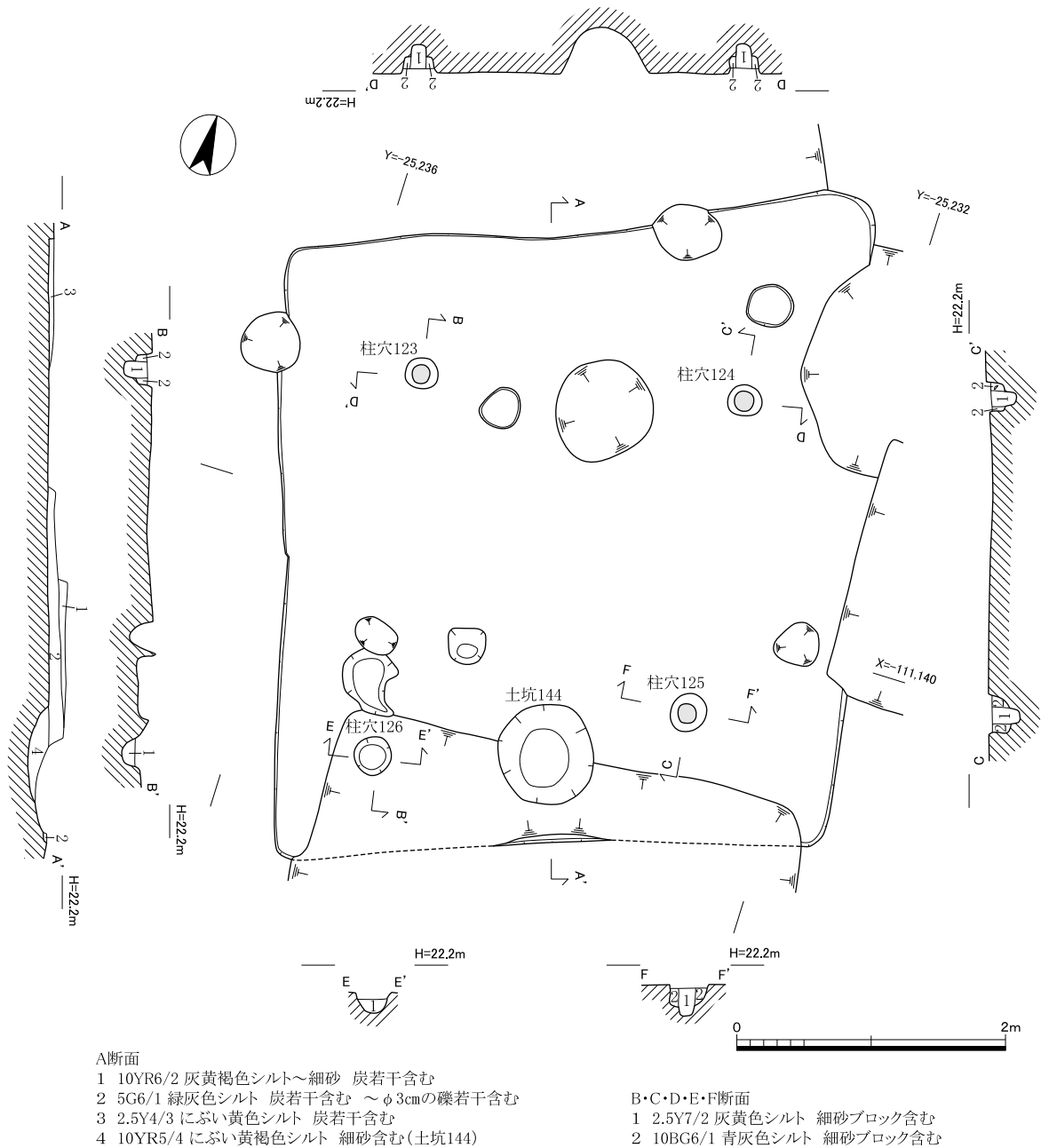


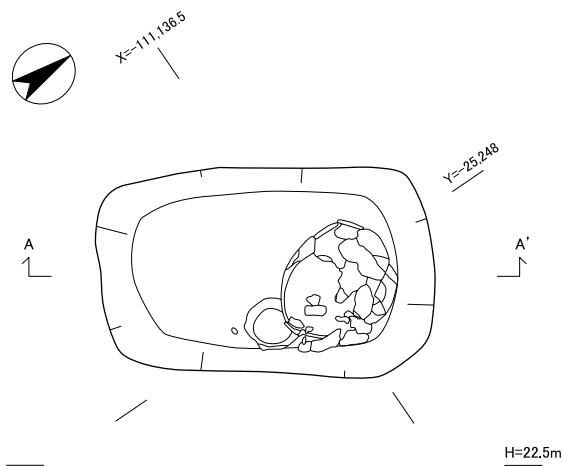
図22 竪穴建物96実測図 (1 : 50)

平面形は方形で、短辺4.25m、長辺4.50mである。検出面からの深さは0.17mである。建物の方位はN17°Wである。主柱穴(柱穴123～126)は平面楕円形の掘形で、径0.22～0.30m、柱痕は径0.14mである。

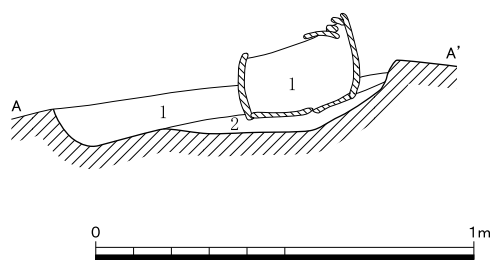
建物埋土からは土師器が出土したが小片のため図化していない。

竪穴建物138 調査区中央で検出した。竪穴建物60・63・85によって壊されている。平面形は方形と推定され、検出長は南北2.05m、東西1.45m、検出面からの深さは0.14mである。建物の方位はほぼ正方位である。建物に伴う施設は確認できなかった。

建物埋土から遺物の出土はなかった。

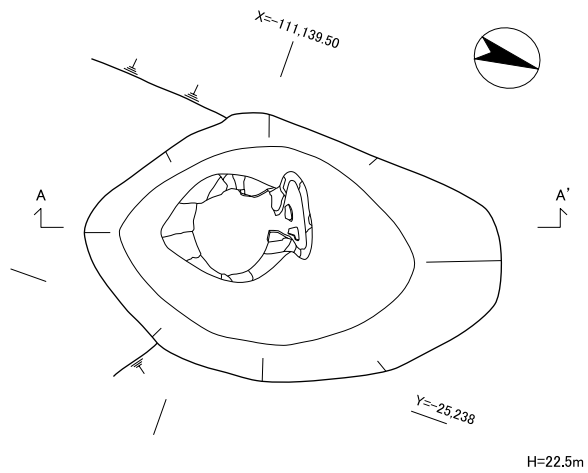


H=22.5m

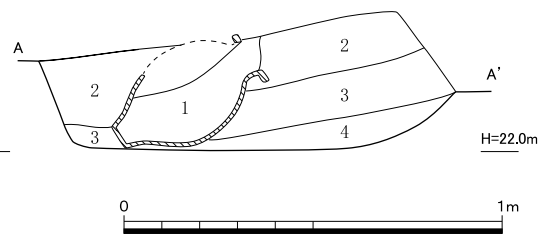


- 1 10YR5/6 黄褐色シルト 細砂 炭若干含む
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト

図23 土坑113実測図 (1 : 20)



H=22.5m



- 1 10YR4/1 褐灰色粘土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック含む
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック含む
- 4 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト

図24 土坑110実測図 (1 : 20)

土坑113 (図23、図版12) 調査区西側で検出した。竪穴建物86と重複し、土坑113が新しい。平面は隅丸長方形で、短辺0.55m、長辺0.90m、深さ0.16mである。土師器の甕が横向きの状態で出土した。出土した遺物は古墳時代後期か。

土坑110 (図24、図版12) 調査区中央やや東寄りで検出した土坑である。平面は楕円形で、平面規模は短軸0.64m、長軸1.10m、深さ0.36mである。ほぼ完形の壺が土坑南側の底につき、北に口を向け斜めに据えられた状態で検出した。土坑の埋土と土器内に堆積した土は大きく異なり、土器内の上部には空隙がある。土坑が埋没した後に口縁部付近が開口し、土砂が流入したと考えられる。出土した遺物は弥生時代中期である。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査で遺物整理箱13箱の遺物が出土した。出土遺物は土器類、石器類がある。土器類の内訳は弥生土器が1割未満、土師器が7割、須恵器が2割である。この他に中世以降の陶磁器が少量ある。遺物の時代は弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世にわたるが、ほとんどが古墳時代である。土坑110から弥生時代の壺がほぼ完形の状態で出土した。

以下、耕作土と主要遺構から出土した遺物を新しい時代順に述べ、詳細は表4・5に記載した。

(2) 土器類 (図25・26、図版13・14、表4)

1は青磁の椀である。見込みは蛇の目釉剥ぎ。龍泉窯である。2は瓦質土器の火鉢である。口縁部外面に印刻花文のスタンプを連続して施す。1・2は耕作土から出土した。ともに14世紀後半と考えられる。3は土師器の高杯である。脚部のみで脚端部が屈曲して開く。外面は9面の面取りを施す。4は土師器の杯蓋である。外面は丁寧にミガキを施す。3は柱穴89、4は柱穴17(柱穴列1)から出土した。3・4は平安京I期である。

柱穴21(掘立柱建物2)出土土器(図25) 5は土師器の杯である。内面に暗文ミガキを放射状に施す。から出土した。5は7世紀代である。

竪穴建物30出土土器(図25、図版13) 6は土師器の長胴甕である。胴部外面にハケを施す。7世紀代と考えられる。

柱穴83(竪穴建物60内)出土土器(図25) 7は土師器の高杯か。内外面は磨滅している。6世紀代か。

竪穴建物60出土土器(図25) 24は須恵器の大型器台脚部である。外面に波状文と沈線を巡らす。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		0箱
古墳時代	土師器、須恵器、石器		土師器19点、須恵器8点、石器3点		9箱
飛鳥時代	土師器		土師器2点		1箱
平安時代	土師器、須恵器		土師器2点		
中世	輸入磁器、瓦質土器		輸入磁器1点、瓦質土器1点		
合計		17箱	38点(7箱)	0箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

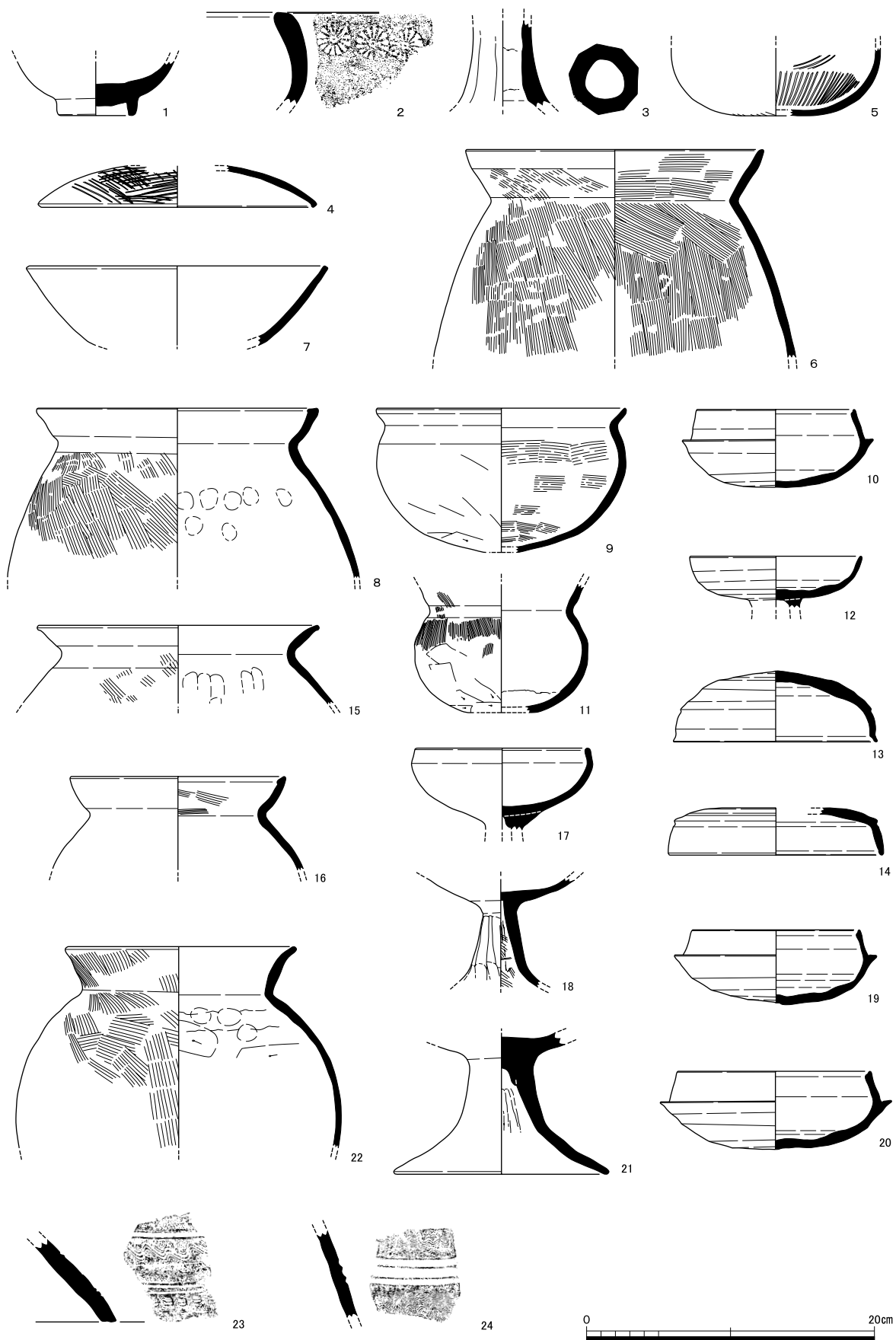


图25 出土土器实测图1 (1 : 4)

竈54（豎穴建物28内）出土土器（図25、図版13） 8は土師器の甕である。口縁部が内湾して立ち上がり、端部を平坦に収める。

土坑67（豎穴建物28内）出土土器（図25、図版13・14） 9は土師器の鉢である。体部は丸みをもち口縁部が短く外方へ屈曲する。10は須恵器の杯身である。底部の1/3をケズリ調整する。口縁部端部は内傾して平坦に仕上げる。10は陶邑編年TK47型式で、年代は5世紀末と考えられる。

豎穴建物86出土土器（図25、図版13） 11は土師器の直口壺である。胴部下半外面はケズリ調整を残し、粗いハケ調整を施す。12～14は須恵器である。12は高杯で口縁部の歪みが著しい。13・14は杯蓋で、口縁端部内面が凹む。天井部の2/3をヘラケズリする。14は口縁部端部が丸みを帯び

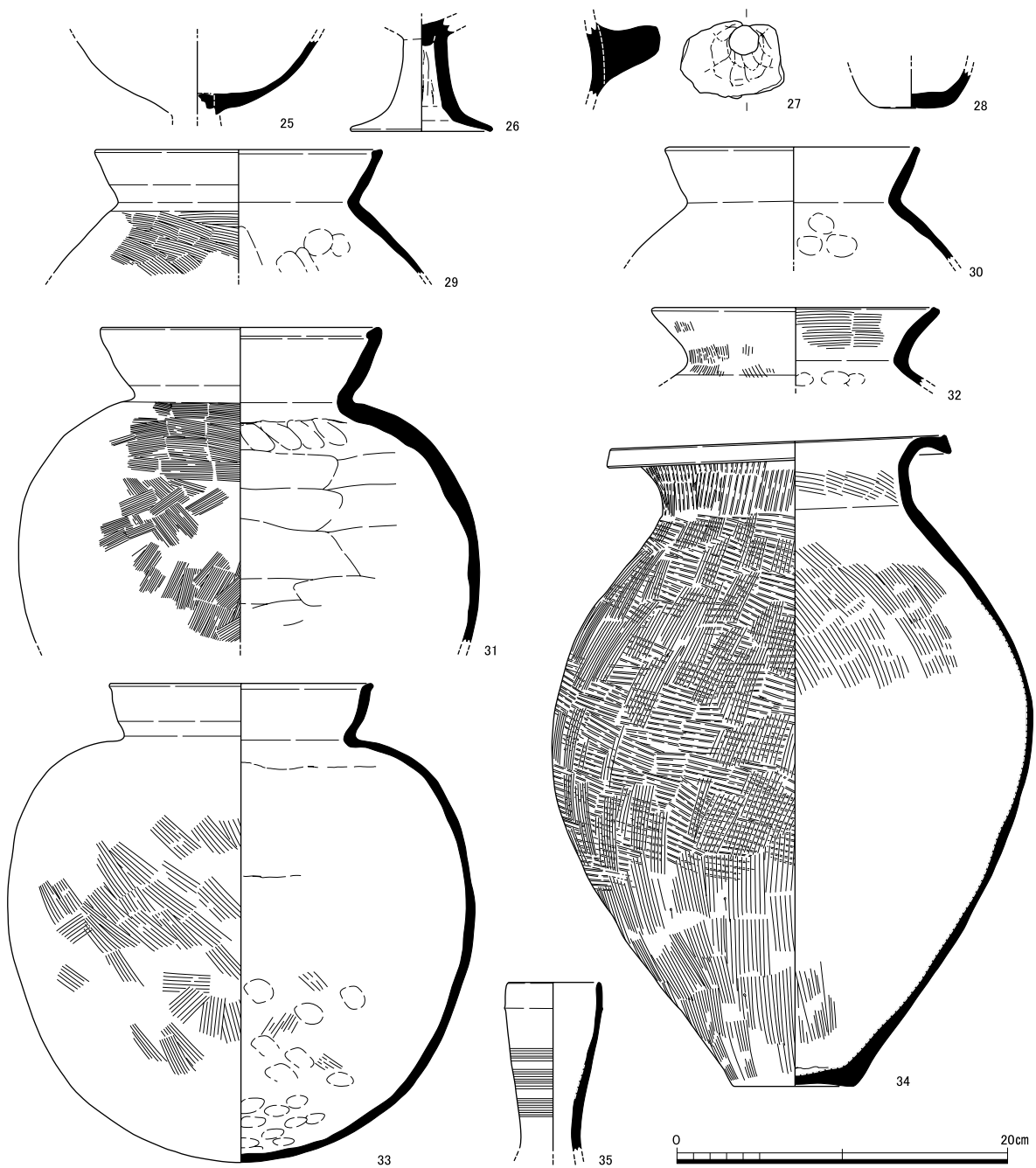


図26 出土土器実測図2（1：4）

る。12～14は陶邑編年MT15型式で、年代は6世紀初頭と考えられる。

土坑133(豎穴建物86内)出土土器(図25) 15は土師器の甕である。くの字口縁で、屈曲部外面を強く横ナデしている。

豎穴建物137出土土器(図25、図版13) 16は土師器の甕である。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部が肥厚する。17・18は土師器の高杯である。17は椀形の杯部で、口縁端部がわずかに内傾する。18は脚部を縦方向のケズリで調整する。19・20は須恵器の杯身である。底部の1/3～1/2をケズリ調整する。口縁部端部は内傾して平坦に仕上げる。19・20は陶邑編年MT15型式で、年代は6世紀初頭と考えられる。

豎穴建物85出土土器(図25) 21は土師器の高杯である。脚部が屈曲して大きく開く。色調は赤橙色である。5世紀代と考えられる。

豎穴建物27出土土器(図25、図版13) 22は土師器の甕である。外面はハケ調整、内面はケズリ調整が確認できる。全体的に磨滅が著しい。5世紀代と考えられる。

豎穴建物63出土土器(図26、図版13・14) 25～31は土師器である。25・26は高杯である。25は椀形の杯部である。26は脚部で短く開く。27は甑の把手である。28は鉢と考えられる。29・30は甕である。口縁部は上方に立ち上がり、29は端部が肥厚する。31は甕である。体部が丸みをもち、肩が張る。屈曲部が強く横ナデする。口縁端部は肥厚する。これらの遺物の年代は5世紀代と考えられる。

土坑113出土土器(図26、図版14) 32・33は土師器の甕である。32は口縁部が外反する。33は体部が丸みをもち、肩が張る。口縁部は上方に内湾して立ちあがり、端部をつまみだす。土坑113から出土した遺物は、6世紀代か。

その他出土土器(図25) 23は須恵器の大型器台の脚部である。外面に波状文と沈線、列点文を巡らす。平安時代の溝10から出土した。

土坑110出土土器(図26、図版14) 34は弥生土器の壺である。体部は胴部上位に最大値があり、底部がすぼまる。口縁部は大きく外反し平坦に収める端部がやや垂下する。体部外面全体にタタキ調整の後に縦方向のハケを施す。体部下半はケズリ調整の痕跡を残す。弥生時代中期後半である。

遺物包含層出土土器(図26) 35は耕作土床土から出土した、弥生土器の細口壺である。頸部に3単位の櫛描文を巡らす。弥生時代中期前半と考えられる。

(3) 石器類(図27、図版14、表5)

石1は石斧状石製品である。縦半分には剥離している。表面全体に擦痕がある。豎穴建物137から出土した。

石2は砥石である。全体が平滑になっている。豎穴建物60から出土した。

石3は石皿である。両面とも凹み、平滑になっている。豎穴建物86の床面に据えられた状態で検出しており、その周辺の床面は著しく硬化していた。

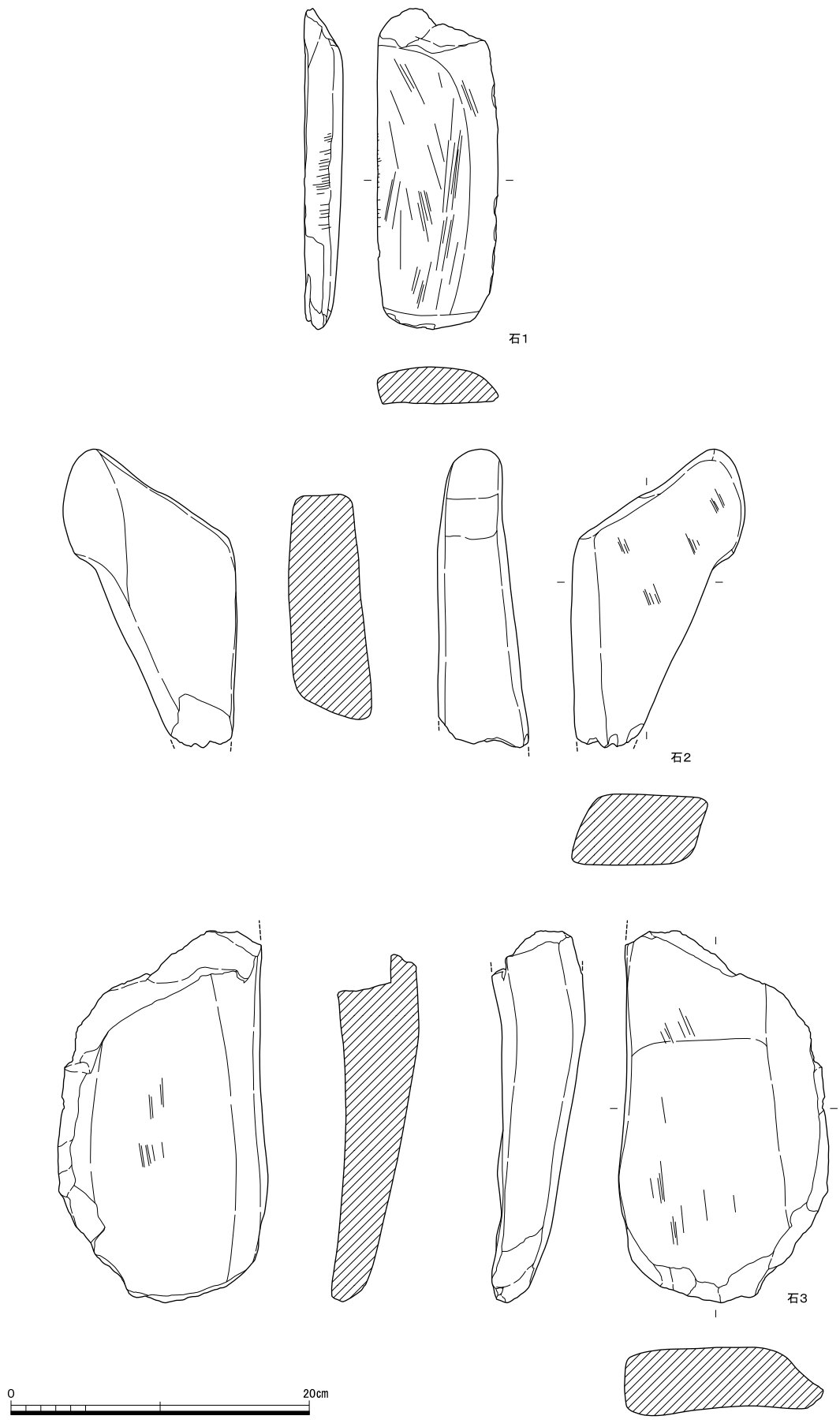


图27 出土石器实测图 (1 : 4)

表4 土器類一覧表

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調・調整など	備考
1	青磁	椀	耕作土	-	(3.8)	4.9	底部のみ 見込み蛇の目釉剥ぎ 龍泉窯	
2	瓦質土器	火鉢	耕作土	-	(6.3)	-	口縁部のみ 外面に菊花印刻文	
3	土師器	高杯	柱穴89	-	(6.0)	-	脚部のみ にぶい橙色 面取り9面	
4	土師器	蓋	柱穴17	18.9	(2.9)	-	杯蓋 つまみ欠損 橙色 外面にミガキ	柱穴列1
5	土師器	杯	柱穴21	-	(4.8)	-	口縁部欠損 橙色 底部内面に放射状暗文	掘立柱建物2
6	土師器	長胴甕	竪穴建物30	20.6	(14.4)	-	灰白色 内外面ハケ	
7	土師器	高杯か	柱穴83	20.5	(5.5)	-	橙色 磨滅著しい	竪穴建物60内
8	土師器	甕	竈54	19.3	(11.8)	-	胴下半欠損 浅黄橙色 胴部外面ハケ、内面指オサエ	竪穴建物28内
9	土師器	鉢	土坑67	17.2	10.1	-	橙色 胴部外面ケズリ 胴部内面ハケ	竪穴建物28内
10	須恵器	杯身	土坑67	10.9	5.4	-	灰白色 底部回転ケズリ	竪穴建物28内
11	土師器	直口壺	竪穴建物86	-	(8.9)	-	口縁端部欠損 にぶい黄橙色 胴部上半ハケ・胴部下半ケズリ	
12	須恵器	高杯	竪穴建物86	11.8	(3.6)	-	灰色 杯部のみ 口縁部の歪みが著しい	
13	須恵器	杯蓋	竪穴建物86	14.1	5.0	-	灰色 天井部回転ケズリ (時計回転)	
14	須恵器	杯蓋	竪穴建物86	14.8	(3.3)	-	天井部欠損 灰白色 天井部回転ケズリ (時計回転)	
15	土師器	甕	土坑133	19.4	(5.5)	-	橙色 外面ハケ 内面ナデ	竪穴建物86内
16	土師器	甕	竪穴建物137	14.8	(6.5)	-	にぶい橙色 口縁部内面ハケ 全体的に磨滅	
17	土師器	高杯	竪穴建物137	11.8	(5.7)	-	杯部のみ にぶい橙色 内外面全体にナデ	
18	土師器	高杯	竪穴建物137	-	(7.6)	-	脚部中心 にぶい橙色 脚部外面ケズリ 脚部内面ハケ	
19	須恵器	杯身	竪穴建物137	11.6	(5.2)	-	灰白色 底部回転ケズリ (時計回転)	
20	須恵器	杯身	竪穴建物137	13.3	5.4	-	にぶい橙色 焼成不良 底部回転ケズリ (時計回転)	
21	土師器	高杯	竪穴建物85	-	(9.9)	14.8	脚部中心 明赤褐色 外面磨滅のため調整不明、脚部内面に絞り痕	
22	土師器	甕	竪穴建物27	-	-	-	底部欠損 黄橙色 磨滅著しい 体部外面ハケ、内面ケズリ 口縁部外面ハケ、内面ナデ	
23	須恵器	器台	溝10	-	(5.7)	-	脚部片 外面に波状文と沈線、列点文	
24	須恵器	器台	竪穴建物60	-	(6.0)	-	脚部か 外面に波状文と沈線	
25	土師器	高杯	竪穴建物63	-	(4.8)	-	口縁部端部・脚部欠損 橙色 磨滅のため調整不明	
26	土師器	高杯	竪穴建物63	-	(6.8)	8.4	杯部欠損 橙色	
27	土師器	甌	竪穴建物63	-	-	-	把手のみ にぶい橙色 短い棒状把手	
28	土師器	鉢	竪穴建物63	-	(2.4)	4.0	底部のみ にぶい橙色 磨滅著しい	
29	土師器	甕	竪穴建物63	17.2	(7.5)	-	胴下半欠損 橙色 胴部外面ハケ 胴部内面ナデ	
30	土師器	甕	竪穴建物63	14.9	(6.8)	-	体部欠損 にぶい褐色 磨滅著しい	
31	土師器	壺	竪穴建物63	16.8	(19.1)	-	底部欠損 にぶい橙色 体部外面ハケ、内面ケズリ 口縁部外面ナデ、ナデ	
32	土師器	甕	土坑113	17.3	(5.3)	-	口縁部のみ 橙色 ナデ	
33	土師器	甕	土坑113	15.8	29.0	-	橙色 磨滅著しい 体部外面ハケ、内面指オサエ 口縁部内外面ナデ	
34	弥生土器	壺	土坑110	20.1	39.0	7.4	完形 黄褐色 外面タタキのちハケ 下半部ケズリ 内面ナデ	
35	弥生土器	細口壺	包含層	5.5	(10.2)	-	体部欠損 頸部に櫛描直線文	

表5 石器類一覧表

No.	種類	形状	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考
石1	石器	石斧状石製品	竪穴建物137	21.5	8.1	(2.1)	砂岩	縦に半分剥離欠損
石2	石器	砥石	竪穴建物60	(20.0)	11.7	6.1	砂岩	全面に擦痕あり
石3	石器	石皿	竪穴建物86	(24.9)	14.1	6.3	砂岩	上面と下面が凹み、擦痕が多く残る

5. まとめ

(1) 遺構の変遷について

今回の調査で検出した主な遺構は、弥生時代の土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴建物、平安時代前期の掘立柱建物や小径である。時代順の変遷は下記のようにまとめられる。

- I. 弥生時代中期（土坑110）
- II. 古墳時代中期（竪穴建物27・28・32・63・85・96）
- III. 古墳時代後期（掘立柱建物3、竪穴建物34・60・86・103・137、土坑113）
- IV. 飛鳥時代（掘立柱建物2、竪穴建物30・62）
- V. 平安時代前期（小径、掘立柱建物1、柱穴列1、柱穴75・89）

最も古い時代の遺構は、弥生時代中期後半の壺を取めた土坑110である。単独の土坑で完形の壺を斜めに据えている特徴から土器棺の可能性も考えられる。

しばらくの空白期間において、古墳時代中期になって方形の竪穴建物が確認できる。古墳時代中期の竪穴建物は、一辺4m前後で正方位からわずかに傾き平面方形で竈をもたないもの（竪穴建物27・63）と、一辺7m前後で壁面に竈を作り付けるもの（竪穴建物28）がある。竪穴建物27・63は床面でまとまって土器が出土した。土師器は甕の胴部が丸く、須恵器を伴わない。竪穴建物32と竪穴建物28は同一方向で重複しないことから同時期のものの可能性がある。

古墳時代後期の竪穴建物は、竈が確認できない一辺7m前後の竪穴建物（竪穴建物86・137）がある。時期を詳細に特定できなかった竪穴建物34・60や土坑113は、遺構の新旧関係や方位から古墳時代後期と判断した。

飛鳥時代の竪穴建物（竪穴建物30）は、一辺が3mに満たない規模に縮小し、柱穴や壁溝がなく、建物の構造が他と異なる可能性がある。奈良時代の遺構は確認できない。

平安時代になると条坊の方向に沿った掘立柱建物（掘立柱建物1）や小径（溝10・11）がある。平安時代中期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が確認できず、宅地としての利用が確認できない。その後、中・近世にかけて耕作地化されたと考えられる。

今回の調査では、竪穴建物が重複した状態で確認されたが、主に古墳時代中期から後期を中心とするものであった。周辺の既往調査をみると、調査1・4・5・9（図5、表1）で、古墳時代中期から後期の竪穴建物が重複して確認されている。古墳時代後期の竪穴建物などの遺構は調査1・4～8にかけて広がっている状況がみてとれる。つまり、古墳時代中期では西京極遺跡範囲の中央に集落の中心があると考えられ、後期になると北西方向にも集落が広がっている様子がみてとれる。古墳時代後期段階では今回の調査地は東の縁辺に位置するのかもしれない。続く飛鳥時代・奈良時代も後期段階の中心地域に掘立柱建物などが展開するが、この段階も中心地域からは外れていると考えられる。

弥生時代をみると、中期段階において西京極遺跡全体で遺構・遺物が確認されるが、集落の中心

は南に偏り（調査1～3・12）、北側に墓域が広がるようである（調査10）。

（2）地質について

今回の調査は、地山上面で遺構を検出したが、地山は同質ではなく、細砂やシルト、粘土が漸移的に堆積していた（図28）。調査区の北側中央が粗砂や細砂などの堆積がみられ、南側に向けて弧状に堆積土の変化がみられる。北側中央から離れるほどシルト、粘土と粒子が細かくなっている（図30）。これは北側中央が微高地で弧状に南側に広がる低地が埋没していった様子がみてとれる。これらの堆積土は遺物を含んでいないため年代は不明であるが、検出した遺構のうち最も古い弥生時代中期までに安定した土地に変化したと考えられる。ただ、本格的に土地利用が開始され、竪穴建物が建てられるのは古墳時代中期（5世紀中頃か）になってからである。

（3）地震痕跡について

調査区南西部の地山（青灰色シルト）上面で直径3～5cmの円形の砂ブロックを確認した。トレンチ1で地山（青灰色シルト）を断ち割って断面確認したところ、シルト層の下に堆積していた粗砂層が上部のシルト層を突き破るように上方にむかっていた（図29）。これは噴砂と考えられ、地震による揺れによって発生した液状化現象を示すと考えられる。なお、遺構との層序の先後関係は不明確であり、地震の年代も不明である。

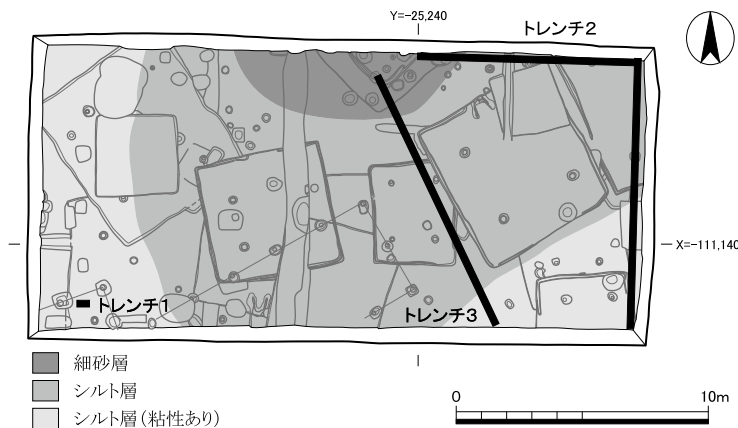


図28 断割トレンチ配置図（1：300）

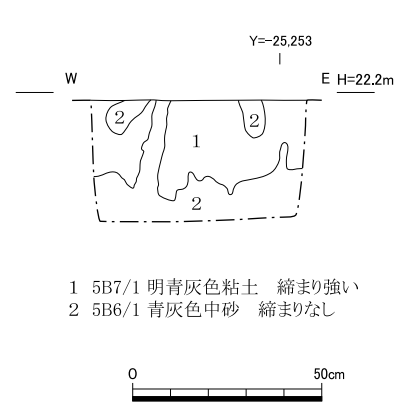


図29 トレンチ1断面図（1：20）

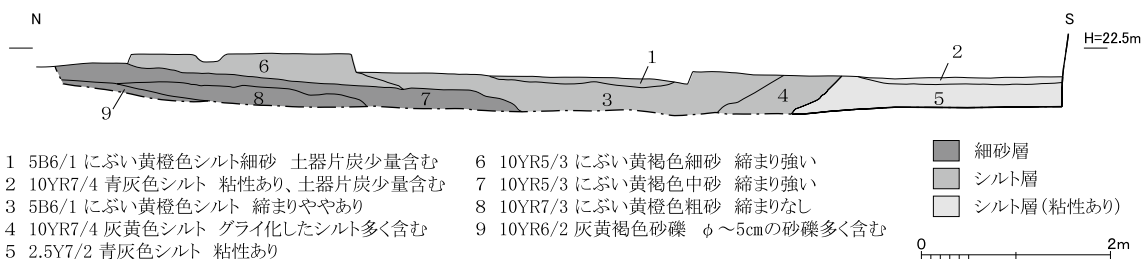
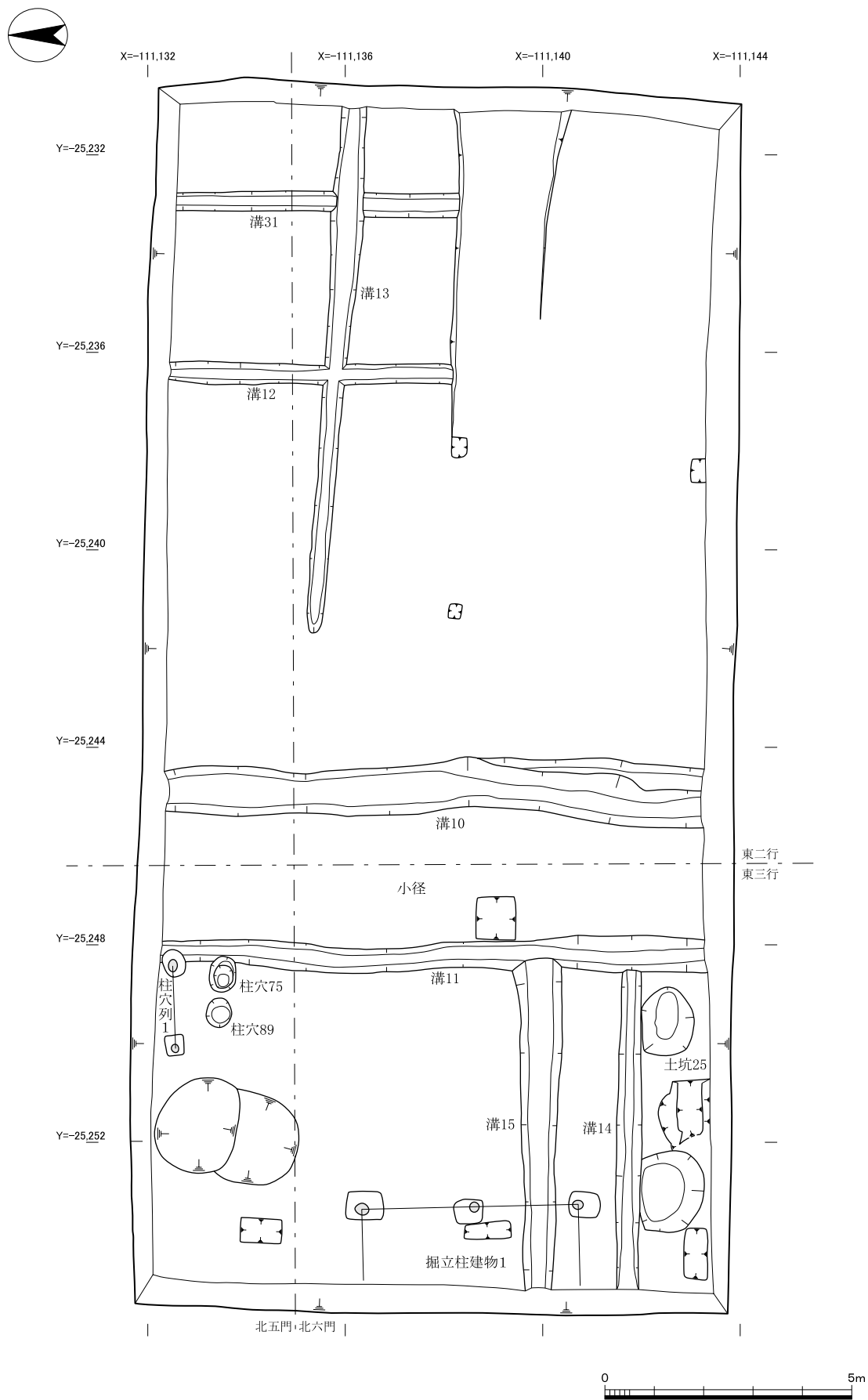
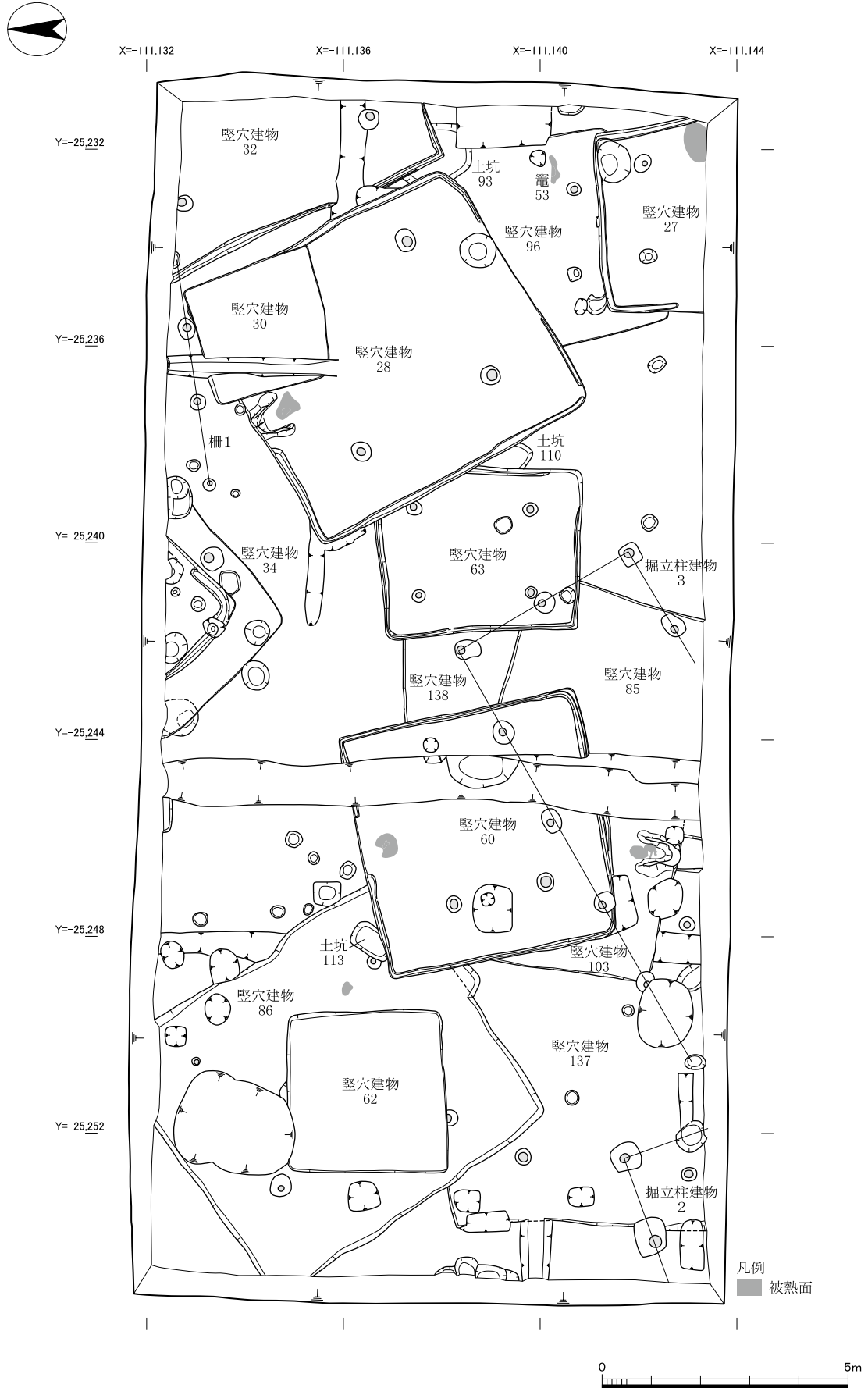


図30 トレンチ3断面図（1：80）

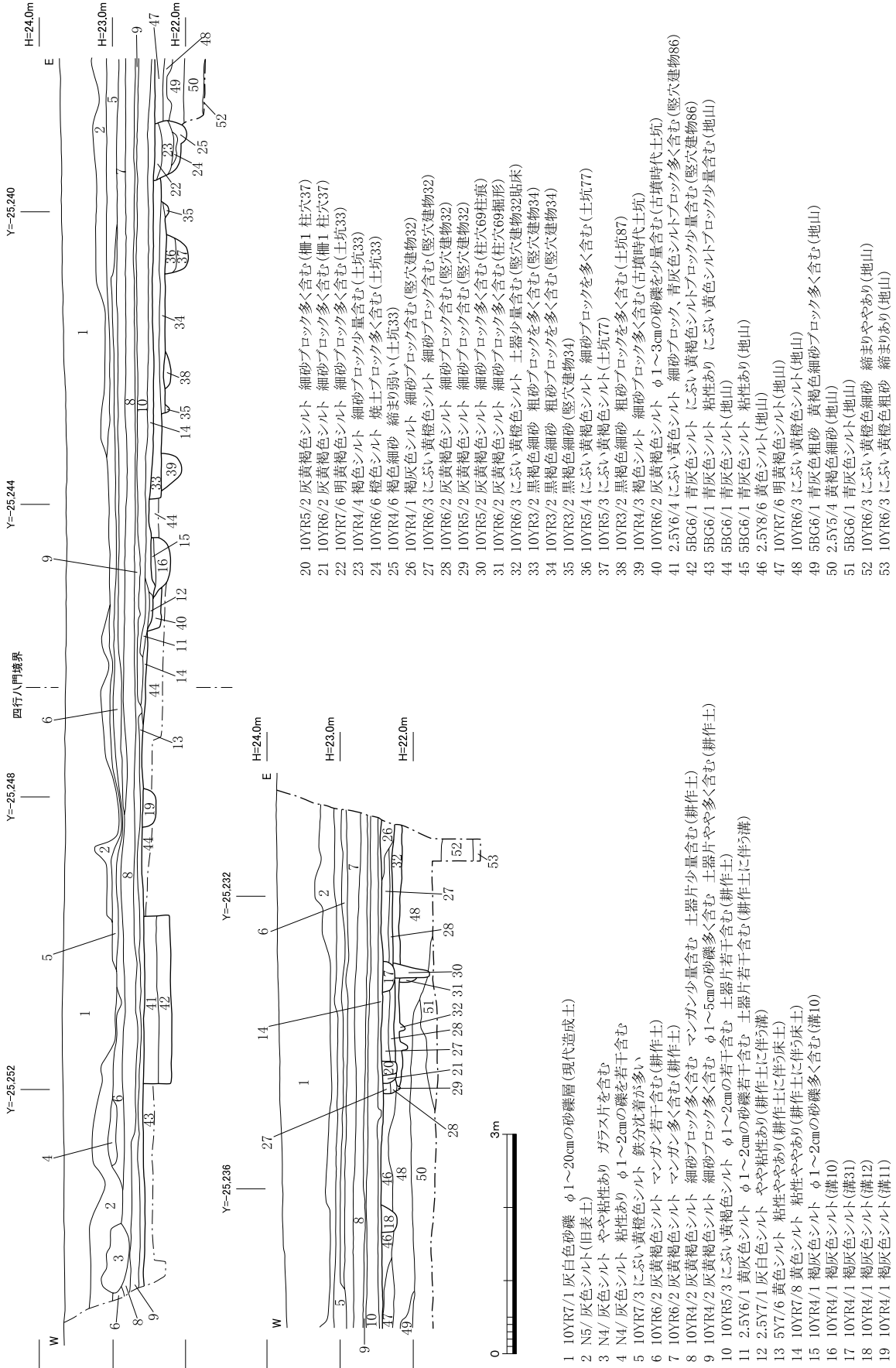
圖 版



第1期 調査区平面図 (1 : 120)

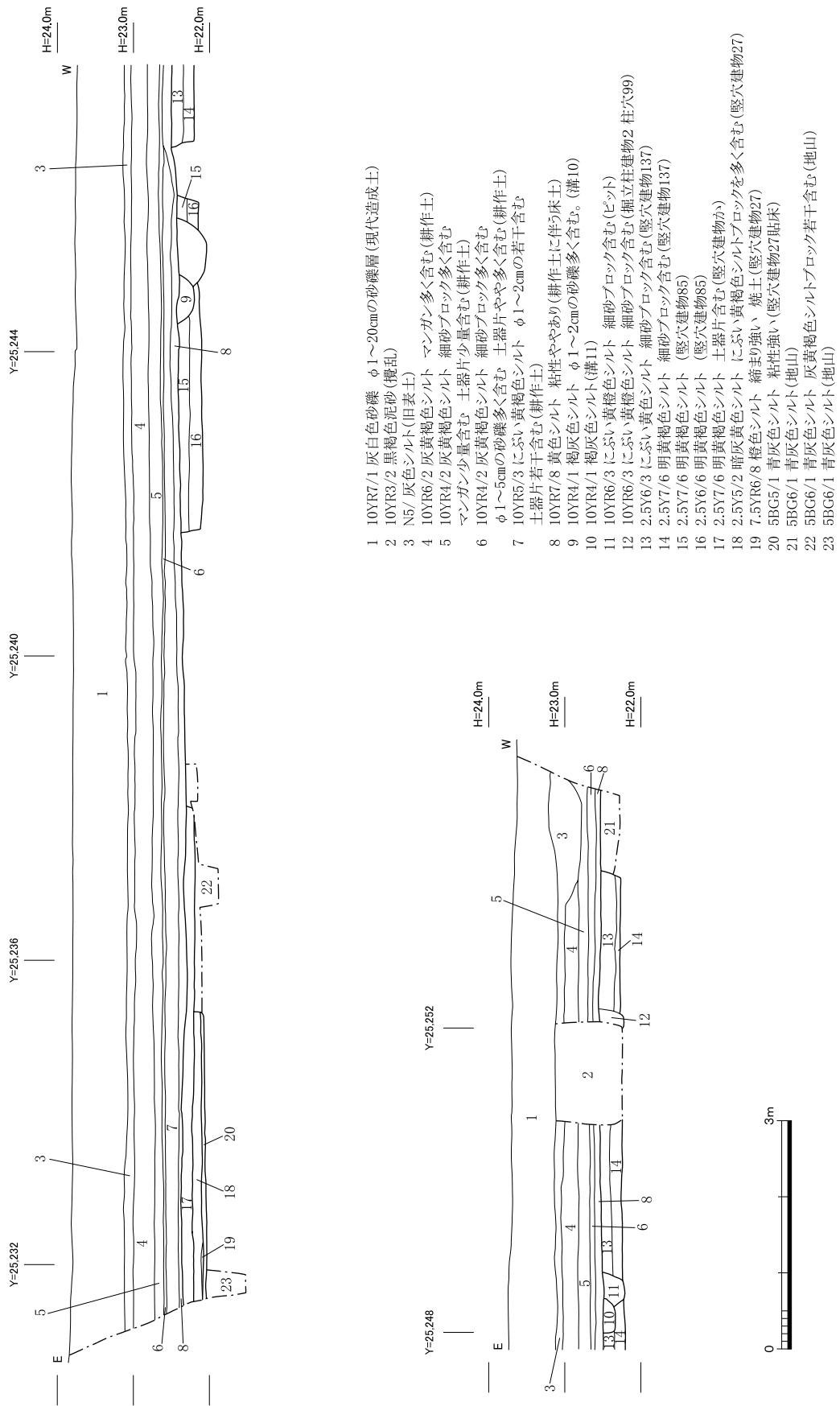


第2期 調査区平面図 (1 : 120)



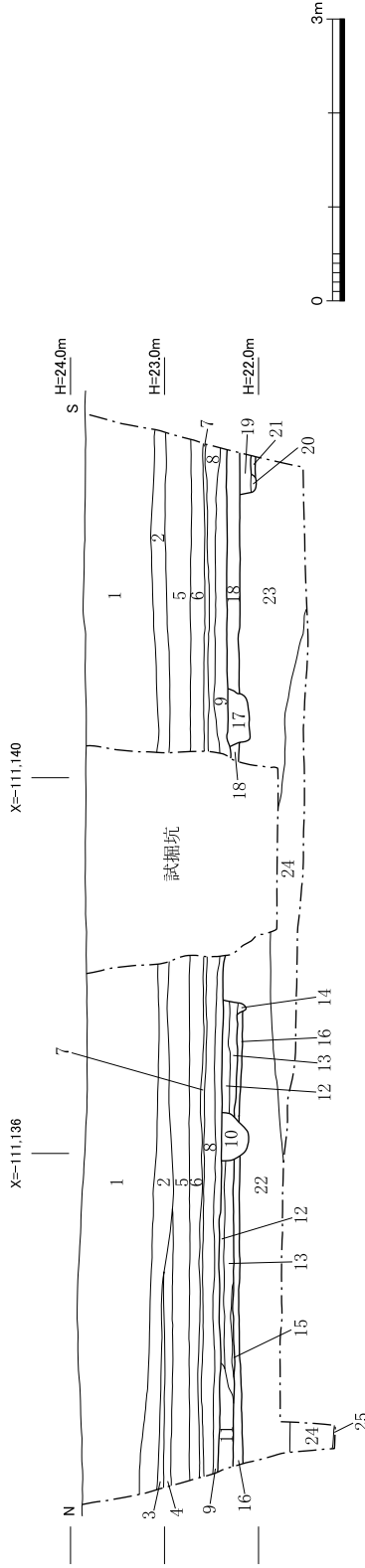
図版 4
遺構

南壁断面図 (1 : 80)



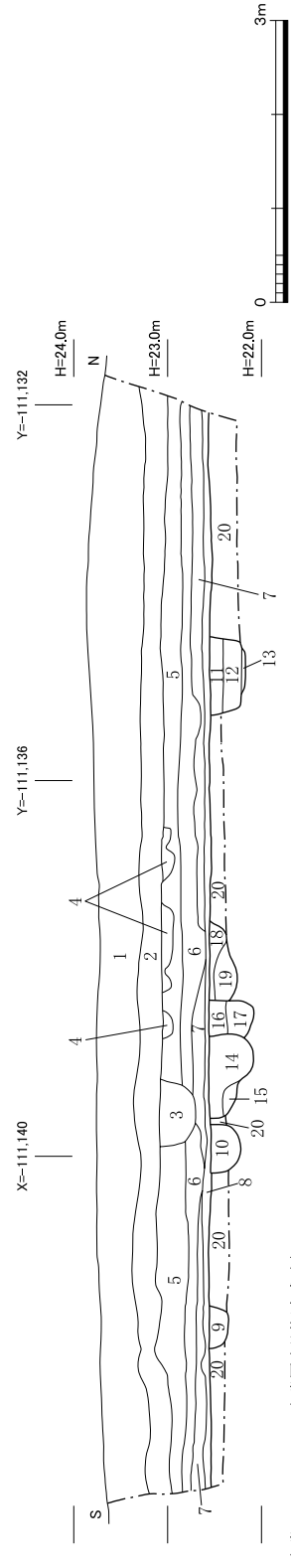
東壁

東壁・西壁断面図 (1:80)



- 1 10YR7/1 灰白色砂礫 φ1~20cmの砂礫層(現代造成土)
- 2 N5/ 灰色シルト(旧表土)
- 3 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト 鉄分沈着が多い
- 4 10YR6/2 灰黄褐色シルト マンガン若干含む(耕作土)
- 5 10YR6/2 灰黄褐色シルト マンガン多く含む(耕作土)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む マンガン少量含む(耕作土)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む φ1~5cmの砂礫多く含む 土器片やや多く含む(耕作土)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト φ1~2cmの若干含む 土器片若干含む(耕作土)
- 9 10YR7/8 黄色シルト 粘性ややあり(耕作土に伴う床土)
- 10 10YR4/1 褐灰色シルト φ1cmの砂礫少量含む(溝13)
- 11 10YR4/1 褐灰色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物32)
- 12 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物32)
- 13 10YR6/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物32)
- 14 10YR5/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物32)
- 15 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 土器少量含む(堅穴建物32)
- 16 10YR6/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物32貼床)
- 17 10YR6/2 灰黄褐色シルト φ1~3cmの砂礫を少量含む(古墳時代土坑)
- 18 2.5Y7/6 明黄褐色シルト 土器片含む(堅穴建物か)
- 19 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト にぶい黄褐色シルトブロックを多く含む(堅穴建物27)
- 20 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(堅穴建物27)
- 21 5BG5/1 草灰色シルト 粘性強い(堅穴建物27貼床)
- 22 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(地山)
- 23 5BG6/1 草灰色シルト(地山)
- 24 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂 縮まりややあり(地山)
- 25 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂 縮まりあり(地山)

西壁



- 1 10YR7/1 灰白色砂礫 φ1~20cmの砂礫層(現代造成土)
- 2 N5/ 灰色シルト(旧表土)
- 3 N4/ 灰色シルト やや粘性あり ガラス片を含む
- 4 N4/ 灰色シルト 粘性あり φ1~2cmの礫を若干含む
- 5 10YR6/2 灰黄褐色シルト マンガン多く含む(耕作土)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む マンガン少量含む(耕作土)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む φ1~5cmの砂礫多く含む 土器片やや多く含む(耕作土)
- 8 10YR7/8 黄色シルト 粘性ややあり(耕作土に伴う床土)
- 9 10YR4/1 褐灰色シルト φ1~2cmの砂礫多く含む(溝14)
- 10 10YR4/1 褐灰色シルト(溝15)
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 細砂ブロック含む(堅穴建物86)
- 12 7.5Y6/2 灰白〜ブレイクシルト 細砂ブロック含む(堅穴建物86)
- 13 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭若干含む(堅穴建物86)
- 14 2.5Y6/1 黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む 炭・焼土若干含む(古墳時代土坑)
- 15 2.5Y5/1 黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む
- 16 2.5Y6/1 黄褐色シルト(古墳時代土坑)
- 17 2.5Y5/1 黄褐色シルト(古墳時代土坑)
- 18 2.5Y6/1 黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む(古墳時代土坑)
- 19 2.5Y5/1 黄褐色シルト 細砂ブロック多く含む(古墳時代土坑)
- 20 5BG6/1 青灰色シルト 褐灰色細砂ブロック少量含む(地山)



1 第1期調査区西半全景（北東から）



2 掘立柱建物1（北から）



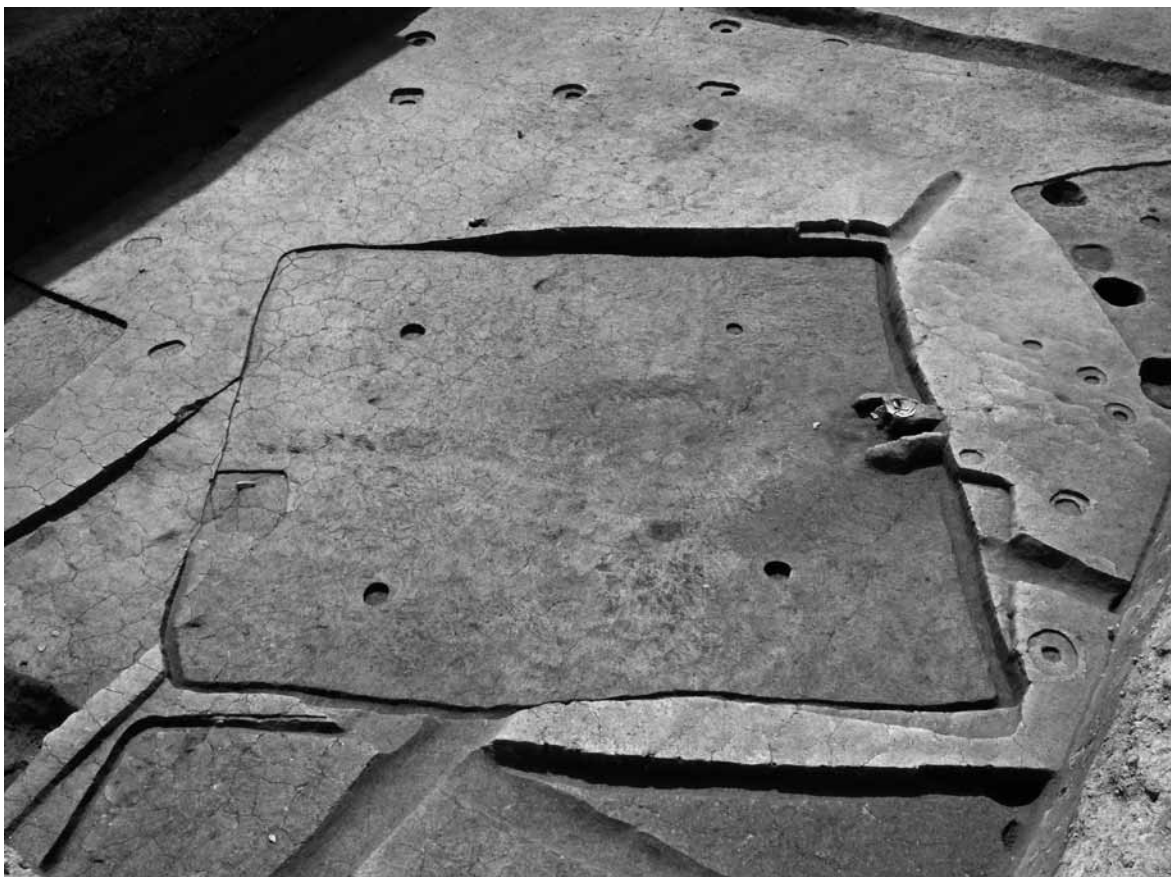
3 掘立柱建物3（北東から）



1 第2期調査区全景（東から）



2 竪穴建物30（南西から）



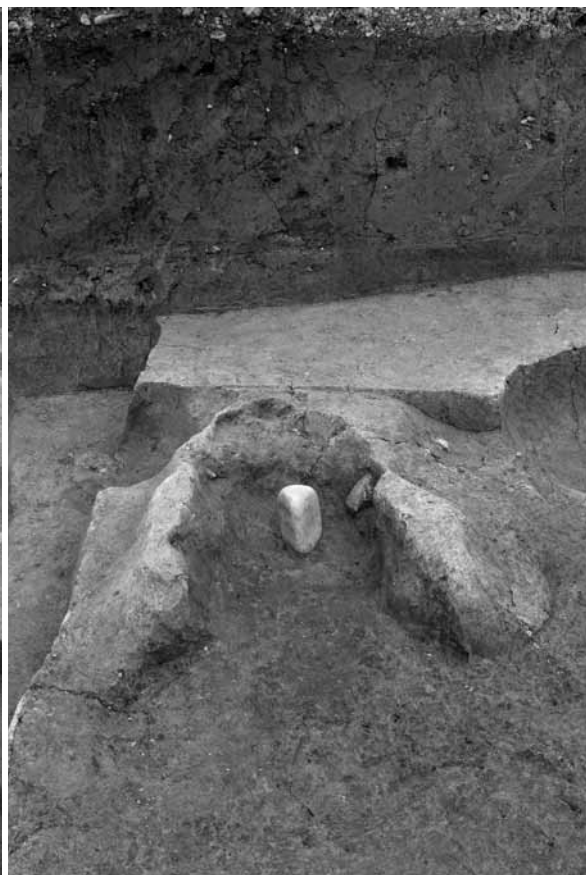
1 竪穴建物28 (北東から)



2 竈54 (南東から)



1 竖穴建物103（北から）



2 竈104（北から）



3 竖穴建物86（南西から）



1 竪穴建物27（北から）



2 竪穴建物27遺物出土状況（北東から）



3 竪穴建物63遺物出土状況（東から）



1 豎穴建物63 (東から)



2 豎穴建物34 (西から)



3 土坑52 (西から)



1 竖穴建物60 (南から)



2 土坑113 (東から)



3 土坑110 (南から)





報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうしぼういっちょうあと・にしきょうごくいせき							
書名	平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-1							
編著者名	持田 透							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 にしきょうごくいせき 西京極遺跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 さいいんしみずちょう 西院清水町131	26100	1 931	34度 59分 52秒	135度 43分 24秒	2016年3月 14日～2016 年5月13日	300㎡	工場建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代	土坑	弥生土器		弥生時代中期の壺が完形で出土。古墳時代中期から後期の竪穴建物を重複して検出。平安時代の小径を検出。		
西京極遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物、竪穴建物	土師器、須恵器				
		飛鳥時代	掘立柱建物、竪穴建物	土師器				
		平安時代	掘立柱建物、溝、土坑	須恵器、土師器				
		室町時代	耕作土	青磁、瓦質土器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-1

平安京右京六条四坊一町跡・西京極遺跡

発行日 2016年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961